

平成14年9月吉日

所属長殿  
関係各位

全国バズ学習研究会研究者代表	
名古屋大学大学院教授	梶田正巳
全国バズ学習研究会会長	
愛知県春日井市立南城中学校校長	長縄秀孝
第34回全国バズ学習研究大会会長	
東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校校長	長谷川貢一

## 第34回 全国バズ学習研究大会のご案内

初秋の候、皆様には益々ご清栄のことと拝察いたします。

この度、第34回全国バズ学習研究大会を下記のとおり開催いたすことになりました。

バズ学習は、「教育の基盤は信頼に支えられた人間関係にあり」という教育理念の基に開発された教育指導技術であり、教育の今日的課題である「生きる力」を育むために積極的に対応できるものと確信しております。アメリカ合衆国をはじめとする先進諸国においても「協同学習」の中核をなす理念としてバズ学習が見直され実践研究が進められているところです。

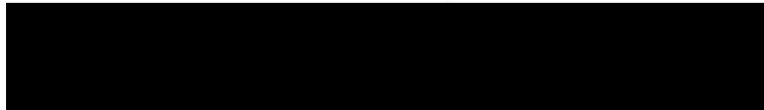
新学習指導要領が実施に移され、一人一人の教師の主体的な指導力が要求されています。この要求に応えるために、第34回全国バズ学習研究大会では、人間関係を基盤とした指導技能を、全国の教育現場における実践研究者と研究室における研究者と膝つきあわて磨き合い高め合う場になりたいと考えております。

全国各界・各地から多数の皆様のご参加をいただきますようご案内申し上げます。

### 記

1 日 時 平成14年11月1日(金) 10:00~16:30

2 会 場



3 主 催 東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校 全国バズ学習研究会

4 後 援 東京都教育委員会 東京都杉並区教育委員会

5 大会主題 「生きる力とバズ学習」  
—— 教師の主体的指導力の開発のために ——

6 日 程

10:00	10:30	11:50	12:50	13:00	16:00	16:30
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

受付・学校見学	開会行事	昼食	移動	分科会	閉会行事
---------	------	----	----	-----	------

(1) 学校見学 校内展示活動見学

(2) 開会行事

① あいさつ

第34回全国バズ学習研究大会会長	
東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校校長	長谷川 貢 一

全国バズ学習研究会会長	
愛知県春日井市立南城中学校校長	長 縄 秀 孝

全国バズ学習研究会研究者代表	
名古屋大学大学院教授	梶 田 正 巳

② 祝 辞

③ 基調講演

「生きる力とバズ協同学習 —実践化への道筋—」	
講師 中京大学教授	杉 江 修 治

(3) 分科会  
 (第1分科会) 幼稚園 小学校低学年

発表主題	提案者	助言者
ピア・サポート -友だち同士のより良い関係づくり- 低学年のグループ活動	望月保美 (東京都杉並区立四宮小学校) 若林信子 (東京都東村山市立萩山小学校)	宇田光 (南山大学教授) 小島幸彦 (中京短期大学教授) 寺井正輝 (春日井市教育委員会)

(第2分科会) 小学校中高学年

未来を創造する力を育てる社会科学習 -みつげようぼくたちわたしたちのみち- 算数科における学習指導の改善	今田宗孝 (愛知県春日井市立柏原小学校) 荒木正志 (東京都練馬区立光が丘第八小学校)	伊藤康児 (名城大学教授) 関田一彦 (創価大学教授) 根深得英 (中野区立第一中学校長)
--	--	---

(第3分科会) 中学 高校

全員参加の授業を目指して 基礎・基本が確実に定着する授業	青森一博 (東京都東村山市立東村山第三中学校) 土岐市立泉中学校研究推進委員会 (岐阜県土岐市立泉中学校)	安永悟 (久留米大学教授) 竹下英二 (福島大学教授) 荻原克巳 (元南山大学教授)
---------------------------------	--	--

(第4分科会) 中学 高校

トライアルウィークの実践 国語科における協同学習の可能性 -今育てたい「ネットワーク構築力」-	前滝康彦 (兵庫県尼崎市立大庄東中学校) 横幕将成 (岐阜県大垣市立北中学校)	石田裕久 (南山大学教授) 坂西友秀 (埼玉大学教授) 久保田滋 (芦屋大学教授) 後藤東一 (土岐市立土岐津中学校長)
---	--	---

7 参加者対象 全国保育園・幼稚園・小・中・高の校長及び教員 大学教職員・学生  
 教育に関係している方・教育に関心のある方

8 参加申し込み 平成14年10月20日までに、FAXまたは郵送で下記へお申し込み下さい。当日参加も結構です。

【申し込み先】



9 参加費(資料代) 2,000円(学生は1,000円)  
 当日、受付で納入してください。

----- キ リ ト リ 線 -----

第34回 全国バズ学習研究大会参加申し込み票

所属	氏名	所属所在地	電話
参加分科会	第 分科会		

※ 昼食を摂るところは、会場周辺にたくさんあります。

2002.10.14

# 協同学習と基礎基本の定着を

スモールグループの活用を中心とした協同学習導入への関心が、学力の問題を本気で考えようとしている教育現場で高まってきている。ただし、協同学習はスモールグループを作って話し合わせるという、授業の技法のことをいうのではない。

日本の代表的な協同学習理論であるバス学習では、「信頼に支えられた人間関係を基盤とした教育」を協同学習と捉えている。

責任を自覚する中で進められるものである。信頼に裏打ちされた安定した人間関係の下で、

そのような活動はまた、人間関係や学習態度などの側面の同時学習を

協同学習の幅広い効果の内、基礎基本の定着という面について考えてみたい。

基礎基本の議論の多くは、教科の自身を基礎基本と発展にどう仕分けするかというものになって

るべきであろう。協同学習の視点からは、当然そのような発想が生まれる。それは新しい時代の学力の中心の中身でもある。受身を強いる授業を排し、能動的な学習技能と学習態度を育てることの重要性は今さら述べ

るまでもなからうが、授業でそれをどう実現していくかの議論は進んでいないように思われる。基礎基本の議論の幅を狭めている大きな原因がそこにあるように思う。

## 「学びの援助」への発想転換で

協同は単なる助け合いのことではない。学びの場で、子供たちが互いの成長意欲を尊重し、相手を高める責

任、相手の援助に心える。子供たちはもっとも適切に学習に意欲づけられ、学び合いを通して、

もたらず。協同学習は達成される学力の中身の豊かさも含めて、効果的な授業を可能にするのである。

そこにはさらに、学習技能の基礎基本と学習態度の基礎基本も視野に入

るべきであろう。協同学習の視点からは、当然そのような発想が生まれる。それは新しい時代の学力の中心の中身でもある。受身を強いる授業を排し、能動的な学習技能と学習態度を育てることの重要性は今さら述べ

るまでもなからうが、授業でそれをどう実現していくかの議論は進んでいないように思われる。基礎基本の議論の幅を狭めている大きな原因がそこにあるように思う。

協同学習は、伝統的な指導法と比較して、学習が遅れがちな子供の習得を確実に底上げすることが明らかとなっている。教科内容の知識、理解面での基礎基本の定着への有効性は実証研究で確かめられている。しかし問題は、学習技能や学習態度も含めた基礎基本を十分に達成させる協同学習の進め方の工夫である。高め合う意欲を共有した協同学習の実現は、今の日本の学校文化の下では容易ではない。

### 全国バス学習研究大会を開催

東京・阿佐ヶ谷中で

11月1日

第34回全国バス学習研究大会が全国バス学習研究会(長縄秀孝会長)と東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校(長谷川貢一校長)の主催で、11月1日午前10時から午後4時半まで、阿佐ヶ谷中学校で開かれる。

大会主題は、「生きる力とバス学習―教師の主體的指導力の開発のために―」で、杉江修治(中京大学教授)が「生きる力と

バス学習―実践化への道筋―と題して基調講演したあと、4つの分科会で討議する。参加費は2000円。



教師の仕事は、「教える」ことではなく、子供が学びを「援助する」という、発想の転換

が実質的になさなくてはならない。子供主体の学び合いの授業は、実は効率的な授業であるということにも触れておこう。

教師の一方的な解説を可能な限り排し、学びを子供の自学と協同に任せることによって、より短い時間で授業を進めることができること、そして、浮かすことのできた時間を完全習得と発展に用いるという工夫の可能性を、従来の指導文化から脱して、試みてみる必要があるのではないだろうか。

(杉江修治・中京大学教授)

### <バズ(Buzz)学習とは>

バズ(Buzz)は、英語で蜂がブンブンという、人がガヤガヤ言う、という意味である。

バズ学習の研究が始まったのは45年ほど前からである。当時、名古屋大学教育心理学教室の塩田芳久教授(名古屋大学名誉教授、故人)は、愛知県海部郡八開中学校の抱える非行、無気力、学力の低迷等の問題を、校長をはじめ教職員と一体となって解決しようと取り組み、学校の立て直しを図る実践に携わった。

この立て直しは、生徒への管理体制を強化するのではなく、教育や指導の力による以外にできない。そのためには「人間関係」を基盤とする指導態勢をいかに確立するかが最緊要な課題である、との共通認識に達した。

当時、わが国に紹介され始めていたアメリカにおけるヒューマン・リレーションズやグループ・ダイナミックスの研究成果を導入した。そして、フィリップス(Phillips. J.D.)の六六法によって代表されるバズ・セッション(buzz session)理論と方法を適用することによって、目標とされる学級の集団づくりや人間関係の改善を図ることが計画され、実践に移された。その結果、学校の立て直しをすることができた。その経緯は『バズ学習方式—落伍者をつくらぬ教育』(昭和37年 黎明書房)で紹介され、広く関心を呼んだ。

人は生まれながらにして社会的存在である。すなわち、集団状況の中で他者からの影響を受け、他者との相互作用の中で知らず知らずのうちに学習し、成長しているのである。したがって、教育は社会化を目指す営みである。

学校教育の中では、知識(認知的面)の習得と、教師と児童・生徒、児童・生徒同士の相互活動の中で、社会性・協調性・意欲等の態度的・感情的な資質を育てる。それによって、その児童・生徒の持つよさ(個性)を育て、より伸ばしていき、将来自立して人びとと連帯し充実した人生を切り開いていく力が身につくように、教師は援助していく責務がある。

これらを見直し、日々の教育活動を「教育の基盤は人間関係にある」という原理のもとに、多年にわたる教育実践者(学校)と教育研究者(大学研究室)との協同研究で、実証性・全体性・一貫性を重視した研究が行われてきた。

「課題のないところに学習は成立しない」。「学習は生徒の自己活動である」。このことから、生徒が個人や班競争の状況下で目標を達成するのではなく、協力し、助け合い、話し合いながら、全員が目標達成を目指す授業の改善を図っている。

バズ学習は、学力と人間関係、認知的目標と態度的・感情的目標の同時達成を目指す学習指導方法論である。

(第22回全国バズ学習研究大会資料に加筆・修正。望月和三郎)

<資料>

バズ学習・協同学習とは

中京大学教授 杉江 修治

バズ学習は、名古屋大学の塩田芳久教授によって開発された学習指導の考え方と方法です。教育心理学の科学的な研究をもとに組み立てられています。塩田教授は、数多くの研究を踏まえて「教育の基盤は信頼に支えられた人間関係にある」という結論を得ました。

確かに、人は、自分を支えてくれる人と一緒にいる時にこそ、そして自分が他人の役に立っていると感じる時こそ、本当の意欲を出すことができます。学校教育では、同じクラスの仲間たちが自分の成長を手助けしてくれる、自分も仲間の成長がうれしい、という関係ができた時や、先生が本当に自分の成長を願って教えてくれているという確信がもてた時、子どもたちは、本来もっている学ぶ意欲を積極的に出すようになります。

バズ学習ではそのような関係を深め、持続させるためにスモール・グループでの学習活動を積極的に導入します。話し合いのざわめきを蜂の羽音に例えて呼んだのがバズ(buzz)の語源です。もちろん学ぶ内容によっては柔軟に一斉指導や個別指導を入れ込むこともします。

スモール・グループでの学習活動は効果的かどうかという疑問を持つ方もいらっしゃるでしょうが、これまでの集団心理学の研究では、一般に、個別指導や一斉指導よりも有効だという結論を得ています。学力の低い子どもの伸びが大きく、学力の高い子どもは教えることを通して学習内容がより定着するのです。あわせて人間関係などの同時学習も可能になる効果的な方法です。もちろん、グループの組み方やグループに与える課題など、教師が工夫を加えなくてはならないポイントはたくさんあります。

バズ学習はまた、子どもの学習意欲を基本的に信頼するという出発点に立っています。学習意欲、成長意欲は誰でももっていると考えます。教師の仕事はその学習意欲を呼び起こし、適切な方向に導くことだと考えています。

スモール・グループで活動することは、そのような意欲開発の手段ともなります。何を学習するのか、学習内容の値打ちをしっかりと知らせたり、学習の計画を教師ばかりでなく子どもも理解することで授業を一緒に作っていくような試みも勧めています。子どもの意欲を前提とした指導は、子どもとの間の信頼関係をつくるのにも役立ちます。

バズ学習は、学校での指導に一貫性が必要だと主張しています。とりわけ大事なのは、一貫した「協同の原理」で指導を組み立てることだと考えています。

ここで、協同について少し確認しておきましょう。協同は、助け合い、支え合いという望ましいイメージとともに、なれあい、甘い、といったマイナスの評価もされるようですが、一人ひとりの子どもたちが本当に伸びるための仕組みをつくれれば、協同のマイナス面は完全に除くことができます。協同する集団の目的として、仲間を伸ばすこと、そこに集団のメンバーとしての一人ひとりの責任があるということを徹底して理解させる働きかけによってそれはできるようになります。

集団心理学では古くから協同と競争の比較をしてきました。競争社会といわれる近年では、競争は不当に高く評価されています。科学的な研究によれば、競争が協同より効果的だという証拠はありません。競争によって意欲をかきたてられる子どもは勝つ見込みのある少数に限られるからです。また勝った子どもも、他人に勝つことが目標ですから、さらに深く学ぼうという意欲は湧かないことになってしまいます。競争の問題点をはっきり知りたいという方は、ユーンという人の書いた『競争社会をこえて』（法政大学出版局）を読まれることをお勧めします。

さて、表題にバズ学習と並べて協同学習ということばを加えました。協同学習 (cooperative learning) は、今、合衆国をはじめとする先進各国でもっとも関心の高い学習指導法となっています。文化を超えて、協同という人間関係のあり方が、子どもの学習を推進するもっとも良い条件であることが分かってきたのです。バズ学習はこの協同学習のなかでもっとも整備された理論です。協同学習について知りたいという方は、ジョンソン兄弟の書いた『学習の輪』（三瓶社）をお読みください。

バズ学習の原理は、教科の指導にとどまらず、幅広く応用されています。生徒指導の原理として、子どもの不適応、問題行動を起きにくくするものとして、実践化されています。また、信頼関係を学校と地域にまで広げて、地域の活性化や非行の克服などに有効性を発揮した事例も重ねられています。

これからも、バズ学習は諸外国の協同学習と学び合い、より幅広い教育活動を展開していくでしょう。バズ学習への関心は、国際化、情報化等の、新しい教育の動向を踏まえた実践を作り上げていくための有力な着眼だと考えます。

# 第34回全国バズ学習研究大会

## 生きる力とバズ学習

—— 教師の主体的指導力の開発のために ——



期 日 平成14年11月1日(金)

会 場 東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校

主 催 東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校  
全国バズ学習研究会

後 援 東京都教育委員会  
杉並区教育委員会

## はじめに

第34回全国バズ学習研究大会会長  
東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校校長  
長谷川 貢 一

本日は全国から多くの方々にご参加いただきありがとうございます。また、ご後援くださいました東京都教育委員会 横山洋吉教育長。さらに、杉並区教育委員会 與川幸男教育長はじめ多くの方々のご臨席をいただき、ここに第34回全国バズ学習研究大会を開会できますことは誠に感謝に堪えません。改めて深くお礼を申し上げる次第であります。

教育改革元年とも言える学校の教育制度が大きく変革していく中であって、平成14年度新学習指導要領に基づいた教育がスタートしました。昨年からのも含めて全国・都・杉並区で変革したものを挙げて見ますと

- 学校完全週五日制
- 相対評価から絶対評価へ
- 都立高校入試の学区制度廃止
- 総合的な学習の導入
- 教員以外の外部講師の導入（以前から、区）
- 部活動希望制（昨年より）
- 学校評議員制度（昨年より）
- 教科書改訂採択（区）
- 学校希望選択制度（区 昨年より）

ざっと挙げても以上のものがあります。多くの中学校が昭和22年より昨年度までの約55年間に渡って引き継がれ、積み重ねられてきた教育が、「0」からのスタートです。

教育の制度が変革しても学校（教員）は変わらないといわれます。教員は多くの指導技術を身につけ、子どもの変化に対応し、子どもを取り巻く情報・環境の変化に対応しつつ、力強く子どもの教育に邁進していくことが強く求められています。また、時代、制度、方法、環境等が変わっても変わってはならないのが人間の心です。人間は人と人との間と書きます。つまり、心の交流が人をつくり出します。会話や対話、コミュニケーションが交流をつくり出します。子どもは心の鍛錬をしなければいけません。仲間と切磋琢磨し遅くなっていきます。そこで、参加していただきました多くの先生方には、バズ学習の論理とともに、是非指導技術を習得していただき、生徒の育成の効果をより上げることが今回のバズ学習全国大会の目的でもあります。バズ学習は子どものもつ力を鼓舞し、共に協力しあい、助け合い、話し合い、認め合いながら人間関係の育成に極めて効果があると考えております。

最後になりますが、ご協力いただきました多くの先生方、保護者の皆様、そして大学生の方々に厚く感謝申し上げます。挨拶と致します。



## 第 34 回全国バズ学習研究大会開催に際して

全国バズ学習研究会研究者代表

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 梶田正巳

第 34 回全国バズ学習研究会を杉並区立阿佐ヶ谷中学校で開催できますことは心からの喜びです。主催校の長谷川貢一校長先生には大変なご配慮をいただき、深く感謝申し上げます。また、第 31 回大会を青梅市立第一中学校で開催していただきましたが、このように東京都で継続的にバズ学習の大会が持てるようご努力を続けていただいていた東京都バズ学習研究会の事務局ならびに会員の皆様、さらには今大会の準備に当たっていただいた多くの先生方にも厚くお礼申し上げます。

近年の教育改革の動向には、その積極的な意義が評価される側面を持ちながら、同時に改革に伴うさまざまな混乱も生じています。今回の大会では、改革の中でも論議の中心となっている「学力」を大きく取り上げました。盛んに行われてきた学力論議の多くはそれをどう実現していくかという現場の実践とのかかわりにおいては不十分だというのが私の認識です。教育心理学の中で見出された「学習への動機付け」という、学習指導を考える上での根本原理を忘れて、いかに高級な学力論議を行っても、それを実現するのに、教師が教え込むという指導方法しか選択肢を持たないのでは実りを期待することはできません。

バズ学習では、教育心理学の基本的原理を踏まえ、児童生徒の動機付けの重要性を一貫して強調してきました。その動機付けは教師がいかに活躍するかという工夫だけでは生まれません。社会的存在としての人間という、人間のあり方をまず認識し、学校教育の場であってもそのことを前提としなくてはいけないでしょう。「信頼関係に支えられた人間関係」、それは単に学級内の児童生徒相互にとどまらず、教師と児童生徒の関係、さらに教師集団内の関係、より広くは学校と地域の関係まで含めて、学習への動機付けの最も基本になることだというのがバズ学習の出発点であり、また追求すべき課題であります。

人間関係に基づく、人間としての本来的な動機付けは、その過程で豊かな同時学習をもたらします。学力を分析的に、さまざまなラベルをつけて議論するよりは、高め合う人間関係の中で学習することを通して同時に習得される統合的な学力を考えていくことが重要ではないかと考えます。

個別の強調、言い換えれば子どもの違いの強調がひとつの基調であったこれまでの多くの実践から、人間性の原理に基づく実践、豊かで統合的な同時学習の追求へと学校の文化が大きく変わることを期待します。バズ学習はそこで重要な視点を提供するものだと考えます。

## 全国バズ学習研究大会によせて

全国バズ学習研究会会長

愛知県春日井市立南城中学校長 長縄 秀孝

第34回全国バズ学習研究大会が東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校を会場に開催できますことを大変嬉しく思っております。また本日までに、全国バズ学習研究会の皆様が着実に実践的研究を積み上げていただき、ここに研究大会が盛大に開催できましたことに厚くお礼を申し上げます。

さて、今年度から教育改革元年として新学習指導要領での教育が始まり、ゆとりの中で生きる力を育むことが求められています。それは、これからの変化の激しい社会に対応するために、周りと協調して共に生きる豊かな人間性や様々な課題や問題に気づき、考え、実践していく主体性を育てていくことでもあります。

また、新しい教育の推進で「総合的な学習の時間」や「選択教科の拡大」「絶対評価」「少人数指導授業」などが導入されて現場での実践が推し進められているところですが、これらで求められる実践は教育理念にもとづいた学校教育全体を貫くものでなくてはなりません。教師集団が主体性を図り、協同的な現職研修を通して「自ら学ぶ力」や「豊かな人間性」を子どもたち一人一人に身につけさせて行く必要があるように思います。

こうした状況の中で、人間関係を基盤にしてお互いが信頼し合い、協同することによって自己実現を図るバズ学習の指導理念は、まさに、子ども一人一人を生かした学習指導方法であり、新しい教育が目的とする「自ら学ぶ力」や「豊かな人間性」の育成に合致するものであると思います。

これらの観点から今回の大会主題は「生きる力とバズ学習－教師の主体的指導力の開発のために－」とさせていただきます。基調提案「生きる力とバズ（協同）学習」をはじめ、全国各地からの提案者の実践報告をもとに、活発な意見交換が行われて実りある研究大会になることを願っております。

最後になりましたが、東京都教育委員会・杉並区教育委員会並びに教育関係諸機関の皆様のご支援をいただきましたことを心から感謝申し上げます。併せて、会員のご協力と役員をはじめ事務局の皆様や東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校の関係者の皆様のご支援に厚くお礼申し上げます。

## ————— 目 次 —————

はじめに

全国バス学習研究大会開催に際して

全国バス学習研究大会によせて

### 〈基調講演〉

生きる力とバス協同学習

—— 実践化への筋道 ——

中京大学教授 杉江修治 …… 6

### 〈第1分科会〉

ピア・サポート

—— 友だち同士のより良い関係づくり ——

東京都杉並区立四宮小学校 望月保美 …… 10

低学年のグループ活動

東京都東村山市立萩山小学校 若林信子 …… 16

〈第2分科会〉

未来を創造する力を育てる社会科学習

—— みつけようぼくたちわたしたちのみち ——

春日井市立柏原小学校 今田宗孝・・・24

算数科における学習指導の改善

東京都練馬区立光が丘第八小学校長 荒木正志・・・30

〈第3分科会〉

全員参加の授業を目指して

東京都東村山市東村山第三中学校 青森一博・・・38

基礎・基本が確実に定着する授業

岐阜県土岐市立泉中学校 研究推進委員会

長瀬教行・古川稔彦・・・44

〈第4分科会〉

トライやるウィークの実践

兵庫県尼崎市立大庄東中学校 前滝康彦・・・50

国語科における協同学習の可能性

—— 今育てたい「ネットワーク構築力」 ——

岐阜県大垣市立北中学校 横幕将成・・・56

〈基調講演〉

# 生きる力とバズ協同学習 —— 実践化への道筋 ——

中京大学教授 杉 江 修 治

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

-----

## 第1分科会

### [発表主題と提案者]

ピア・サポート  
—— 友だち同士により良い関係づくり ——

東京都杉並区立四宮小学校 望 月 保 美

### 低学年のグループ活動

東京都東村山市立萩山小学校 若 林 信 子

### [助言者]

宇 田 光 (南山大学教授)

小 島 幸 彦 (中京短期大学講師)

寺 井 正 輝 (愛知県春日井市教育委員会)

### [司会者]

野 瀬 博  
(東京都杉並区立井草中学校教頭)

### [記録者]

朝 日 啓 子  
(学校法人杉並学院 中学・高等学校)

# ピア・サポート

## —友だち同士のよりよい関係づくり—

東京都杉並区立四宮小学校  
望月 保美

### 1. はじめに

児童は、親の価値観の多様化や地域及び家庭の教育力の低下などにより、人とかかわる機会が減少している。そのため、友だちとかかわりが苦手な児童が増え、孤立したり悩んだりしている。そこで、人とかかわる力を育てることが、学校教育の場での課題となり、様々な教育活動が実践されている。

かかわりを育てる教育活動の1つとして、ピア・サポートがある。ピア・サポートとは、教師のもとで、トレーニングを受けた児童（ピア・サポーター）が、困っている仲間に支援活動を行うものである。ピア・サポーターは、かかわり方のトレーニングを受け、かかわり方を身に付ける。トレーニング中での気付きや身に付けたことを支援活動に生かす。ピア・サポーターの活動を見ている他の児童は、支援されたことへの感謝とともに、かかわりのモデルとしてかかわりを学ぶことが出来る。こういう活動を通し、かかわりのスキルとともに人を見守る優しい目を広げていけると考える。

ピア・サポートは、カナダ・イギリスなど多くの国々で実施されている。最近、日本でも取り入れる学校が増えてきた。委員会活動での実践が多く見られるが、相互に見合う目を育てたいと思い、学級で実践することにした。トレーニングの後のシェアリングの時間・個人のサポートの内容を決めるとき・実践中の振り返りの時間に協同学習を用いることにした。

### 2. 実践研究の内容・方法

- ①Q-U\*1を実施して、児童の感じる学級の居心地のよさとやる気を把握する。
- ②ピア・サポートのトレーニングを行う。シェアリングに協同学習を用いる。
- ③サポート内容を決める。KJ法\*2・協同学習を用いる。
- ④ピア・サポートの振り返りを行う。2週間に1回協同学習の方法で実施する。
- ⑤Q-Uを実施し、個人の変容、学級の変容を把握する。
- ⑥不満足な状態にいる児童に対しては、個別面接し、ピア・サポートの達成感を持たせる。

\*1 Q-U: Questionnaire-Utilities の略。河村茂雄が作成した「たのしい学校生活を送るためのアンケート」。次の1、2、3から成っている。

- 1.やる気のあるクラスを作るためのアンケート [学校意欲尺度]

2. いごちよいクラスののにするためのアンケート [学級満足度尺度]

3. 自由記述アンケート (こんなクラスにしたい・友だちしょうかい・ねがいごと) からなる。

\*2 KJ法: 川喜田二郎が発案した発想法の1つ。カードに書かれた多くのデータを同じ種類ごとに分類する方法。

### 3. 仮説

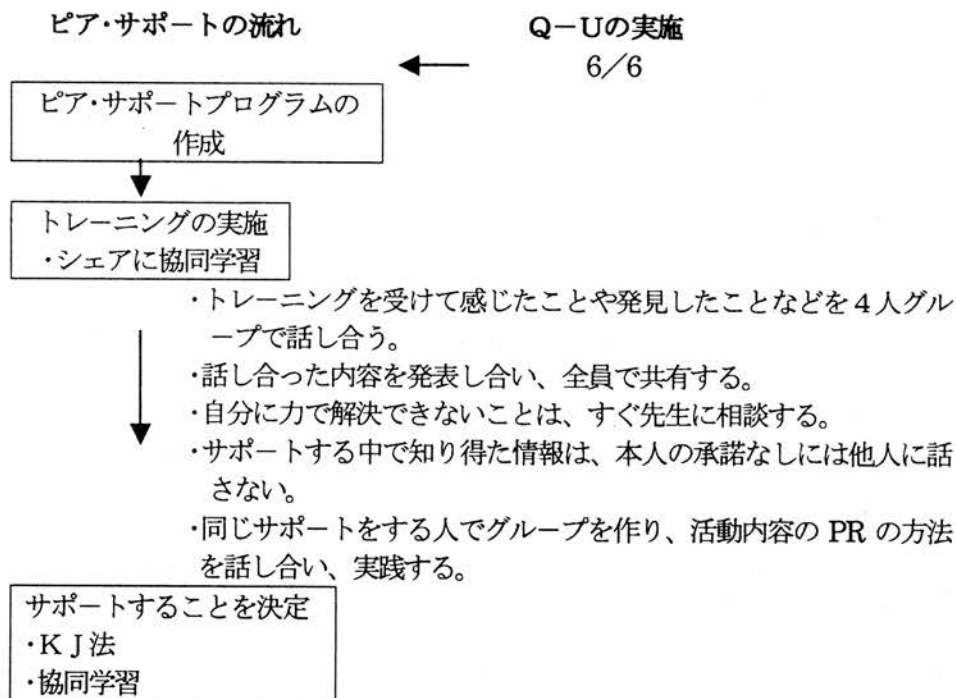
ピア・サポートを積極的に行うことによって、自己有用感が増し、児童のやる気を喚起するのではないかと。また、自尊感情も高まり、学級のいごちのよさも増すのではないかと。

協同学習を用いることにより、感じたことの共有、気付かなかったことへの気付き、問題解決への協力などができ、より支えあう気持ちを持つことができるのではないかと。

### 4. 研究の内容

(1) ピア・サポートとは

教師によってトレーニングを受けたピア・サポーターが、仲間に自分のできることを通して支援することであると理解し、実践した。実践のプロセスを下記の図で表した。





- ・自分の得意なことや長所を考える。
- ・友だちのよい所をカードに書いて渡す。
- ・カードを種類ごとに分けて貼る。
- ・自分で決めたサポートの内容を発表し合う。

#### 活動

・振り返り（協同学習）

← 11/26・12/15

- ・おなじサポートをするグループに分かれ、うまくサポートできたこと、嬉しかったこと、うまくできなかったこと、困っていること、感想を話し合う。
- ・話し合ったことを発表し合う。

#### <学級での実践>

学級でピア・サポートを実践しようと考えたのは、トレーニング時間の設定がし易いということと、活動への意識が低い児童もいるが、学級が発信基地となるため、全員の意識の向上が図れると考えたからである。

#### <トレーニングの実施>

トレーニングの内容は、「ピア・サポートではじめる学校づくり」の中から選び、「自己理解、他者理解」「コミュニケーションスキル」「問題解決スキル」「対立解消スキル」を行った。トレーニングをした後は、必ずシェアリングを行い、自分の気持ちや他者の考えを理解するようにした。

トレーニング修了者には、修了証を渡し、自覚を高めた。その際、「守秘義務と限界」について話し、サポートをする中で知り得た情報は、本人の承諾なしに他者に話してはいけないが、相談の内容によって、おとなに相談することもあることを理解させた。

#### <サポート内容の決定>

トレーニングを受けた後すぐに内容を決定するのではなく、自分の特徴を知るために自己を見つめる期間を設けた。また、それと平行して学級の友だち全員の長所を見つけ、カードに書いて渡した。それは、友だちからのカードに書かれていることを参考に自分の考えを決めて行けるようにするためである。友だちが見る自分は、どのような特徴を持っているのか判りやすく分類するためにKJ法を用いた。さらに、グループで話し合うことにより、自分の決定したサポートの内容を確認できる。また、同じサポート内容の人と話すことにより、活動に深まりを持たせることができる。

#### <振り返り>

活動してよかったこと、嬉しかったことを話し合うことにより、活動意欲を喚

起できる。活動を進める上で困っていることを話し合うことにより、1人で悩まず、友だちの考えやアイデアを聞くことができる。また、話し合いの様子を発表することによって、学級全体で活動を共有できる。

## (2) 実践経過

<1学期> 学級雰囲気作り・仲間関係づくり・兄弟学級\*3 3年1組との関係づくりの時期

- ・構成的グループエンカウンターの実施
- ・全校遠足（兄弟学級の3年生と一緒に行動した遠足）作文より
  - 3年生にもっと優しくしたい。
  - 気持ちを聞けなかった。
  - 相手の声を聞く方法を知りたい。
  - 気持ちの伝え方を知りたい。
  - けんかの仲裁の仕方を知りたい。
  - 話し掛け方を知りたい。
  - コミュニケーションの方法を知りたい。etc.
- ・3年生との交流（グループ作り・交流遊び・弁当 [全校遠足が、雨のため延期になった時に、3年1組と一緒に教室で弁当を食べた。]）
- ・Q-Uの実施（6/6）

\*3 兄弟学級、平成13年度から四宮小学校では、児童相互のかかわりを学習させるために、6年生と1年生、5年生と3年生、4年生と2年生が、1組同士、2組同士、3組同士が兄弟学級となって、全校遠足や交流遊び（学校で決めた月1回の交流遊び週間に兄弟学級で相談し、休み時間などに一緒に遊ぶ。）交流給食を1年間継続して行うことにした。

<2学期>ピア・サポートの実施

- ・ピア・サポートトレーニングの実施
  - ① 知り合うために「この人は誰でしょう。」(9/17)
  - ② 協力するために「四角形」(9/18)
  - ③ 気持ちや感情「お話作り」(9/19)  
「プラスとマイナスの気持ち」(9/19)
  - ④ 聞き方 伝え方
    - ア. 気持ちを聞き取るには 「スイッチ」(9/20)
    - イ. 話を伝えるには 「背中合わせと向かい合わせ」(9/21)
    - ウ. 聞くときの姿勢や態度 「役割カード」(9/25)
  - ⑤ 人間関係づくり 「頼む時 断る時のロールプレイング」(9/26)
  - ⑥ 普段の生活の中で 「わたしの考え」(9/27)
- ・ピア・サポートの内容を決定 (10/18)
- ・振り返り (11/1)

- ・Q-Uの実施 (11/26)
- ・振り返り (11/29)
- ・振り返り (12/6)
- ・振り返り (12/13)
- ・Q-Uの実施 (12/15)

### (3) ピア・サポートの内容

- ・誕生日を祝う
- ・あいさつをする
- ・勉強を教える
- ・元気がない人に声をかける
- ・遊びに誘う
- ・相談にのる

### (4) Q-Uの結果

学校生活意欲得点の変化得点が上がった児童は、11人、得点が下がったのは、5人である。

上がった11人は、現在友だち関係が円滑になってきているが、下がった5人は、友だち関係で、何らかの問題を抱えている児童である。

11月26日の結果が、多くの児童の得点が下がっているが、振り返りによるピア・サポートの教師側からの援助が不足したためであると考えられる。

いごちのよいクラスにするためのアンケートからは、1人の児童が友だちから支援されない、認められないという意識を持っている。そのため、児童相互の関係を深めるとともに個別に面談をし、支援していきたい。

学級全体としては、いごちのよいクラスに近づいていると考えられる。

### (5) 協同学習

協同学習は、他の教科学習にも活用している。そのため、学習方法は、身につけている。

ピア・サポートの実施は、学級全員が対象であるため、1人の担任が33名の児童を見ることになる。協同学習は、4人のグループで行い、一人一人が役割を持ち活動するため、よく聴き合い協同して活動できる。担任は、活動の様子を観察し、そこで起こっていることをキャッチできた。

ピア・サポートの内容を決定する際には、自分を見つめ、自分できるサポートを考える時に、「友だちとの考えの交換は大いに役立った。」と児童が述べているが、児童相互の話し合いは、活動を進めるうえでも有効に機能していた。

## 5. 結果と考察

Q-Uの結果から見ると、ピア・サポートを実施したことは、児童のやる気が増

幅し、児童の自己存在感を増す。2回目のQ-Uの結果が、落ち込んだのは、振り返りによる教師側のサポートが十分でなく、児童のピア・サポートの評価が十分にされないために不満感を持ったからと考える。そのため、3回目の実施までに、振り返りを十分に行い、児童相互、教師からの評価が十分に一人一人の児童に伝わるようにした。3回目では、ほとんどの児童のやる気が増し、学級もいごこちがよいと感じるようになっている。

また、数人の児童は、放課後近くの保育園へ絵本の読み聞かせや遊びのボランティアをして、保育園児へのサポートを行っている。

学校生活の中でも、友だち同士のけんかの仲裁や悩み事の相談が、できるようになってきている。

学級の中に常に友だち同士で見合う目が育ってきており、怪我をした友だちの階段の上り下りに荷物を持ってあげたり、周りをガードしたりさりげなくする児童が増えてきた。

本年度は、6年生となり、1年生の兄弟学級とのピア・サポートや学校全体を見通してのサポートを実践するため活動を開始したところである。入学後間もない1年生が、友だちができず登校を渋った時も家まで遊びに行ったり、朝迎えに行ったり自主的に行動した。

サポート内容の決定に際しての、自己決定を支えるための手立ての工夫が今後の課題である。

#### 参考文献

- ・ピア・サポートではじめる学校づくり 滝 充 金子書房 (2001)
- ・エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集  
国分康孝 図書文化 (1999)
- ・エンカウンターで学級が変わる 小学校編 国分康孝 図書文化 (1996)
- ・エンカウンターで学級が変わる 2 小学校編 国分康孝 図書文化 (1997)
- ・子どものためのアサーショングループワーク  
園田雅代・中签洋子 日本精神技術研究所 (2000)
- ・ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 国分康孝 図書文化(1999)
- ・崩壊しない学級経営をめざして 河村茂雄 学事出版(1998)
- ・学習の輪 アメリカの協同学習入門  
ジョンソン, D.W、ジョンソン, R.T、ホルベック, E. J  
杉江修治ら訳 二瓶社 (1998)
- ・[協同]による総合学習の設計 Y.シャラン S.シャラン  
石田裕久ら訳 北大路書房 (2001)
- ・Q-U実施・解釈ハンドブック 小学校用 河村茂雄 図書文化 (1999)
- ・Q-U学級満足尺度による学級経営コンサルテーション・ガイド  
河村茂雄 図書文化 (2000)

## 低学年における班活動の工夫

東京都東村山市立萩山小学校 若林信子

### 1. はじめに

私はこれまで中学年の学級経営を行うとき、生活でのめあてを達成するたびに、少しずつ広い視野に立ち目的意識を高める手だてを取ってきた。最終的にはクラスのユートピアを築こうとするものである。班作りのスタートは家族作りから始める。家族の中心になる子どもたちは、「かいこ」にした。卵からケゴにしておき、動き出す命を見て生命を守る家庭を築いていくのである。

#### 発展経路

{ かいこ家族→村→町→市→県→国→星→星座→宇宙→ユートピア }

自分たちで生活のめあてを作りそれが達成できると、次のめあてを見つけ、目的に向かって新しい班が生まれる。めあては、学校行事に添うものや学級の問題を取り上げた。

### 2. 昨年度の試み

10年ぶりの一年生担任を機に家族作りから始めてみることにした。

#### (1) 『家族を守ろう班作り』

#### (2) 班員の決め方

① 班の構成 男2 女2 4名

② 教師の指導で、協力できそうな人を探す。好きなもの同士で班を作ることになった。

#### ③ 結果

- ・ 桑の葉取りから蚕の家作り、フンの始末などの世話をよくした。すぐ泣いたり怒ったりする子は、蚕家族を作ってから「おとうさん、おかさん」と呼ばれるだけで我慢強くなった。
- ・ 班の友だちと学校だけでなく、下校後も約束をして遊べるようになった。
- ・ 生き物大好きさんが、活躍した。
- ・ 始めの頃は学習も遊びもルール作りをするときも【 班長＝中心＝まず先に】の図式がよく見られた。
- ・ 班長になる子は、まわりの子より先が見え、自分にやりやすい方法を探ろうとする。これに対して、1年生では、年齢的にまだ自己中心的に物事をとらえることから、率直に自分の不利益を訴えていた。
- ・ 班活動をまがりなりにも実施する中で、公正さや班員一人一人の幸せを追求する発言が広く見られるようになった。このことから低学年における班活動の工夫をさらに試みてみたいと思った。

#### (3) 次の班替えの時に、でてきた問題点～『班員の決め方をかえてほしい』～

- 【理由】
- ① 組みたいと思う人が別の人と組みたかったり、他の人に先に取られたら、やる気がなくなる。
  - ② だれからも声を掛けられない人が出るかもしれないという心配がある。

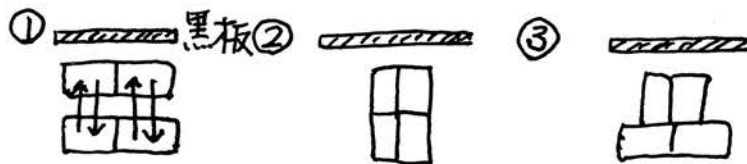
【希望】 くじ引きで決めよう  
【理由】 みんなが、がまんするから同じになる。

※ここで、くじ引きによる方法を取り入れた。

(4) 教室内の班活動中の机の配置を段階を踏んで、次のようにした。

- ① 入学当初は出席簿順に並んでいた。構成メンバー4人なので1列と2列、3列と4列、・・・が机を寄せ合い、話し合ったりするときは、前から奇数番目の子が後ろを向く。(奇数番目の児童は黒板に背を向けるかたちになる。)
- ② ①のようにしたとき、教師の話や一斉に指導をするとき、常に後ろ向きになっている子は向きを変えなければならない。  
1列と2列、3列と4列、・・・が机を寄せ合い、お互いに向き合うようにした。
- ③ ②の並び方で黒板に遠い子は前を向くようにした。

※①、②、③の順に図示しておく。



(5) 班の取り組みで、育ててきた事例を述べる。

1) ダンゴムシレースで気づいた班長の役割

1年のはじめ頃、生活科の学習で「ダンゴムシレース」を行った。当然ながらダンゴムシを運んだり手順の相談やまとめ役は班長がつとめていた。

いよいよレースが始まった。よく見ると、どの班も班長自らトップバッターをつとめていた。皆夢中で応援していたが相手が小さいだけに横道にそれたものを観戦するのは難しく、前の方に陣取っている班長たちだけが、楽しそうに見えた。

後ろの方にいる子たちは、口をとがらせて抗議。ゲームを中断して「観客席の決め方」について話し合った。

その結果、レースをする人とサポーターが1組になり2列で順に後ろに並んで移動していけば全員が一番前で観戦できることを見つけた。

この時からクラスで問題が起きても、一番良い方法を自分たちで見つけだそうとするようになった。そして班長の役割についても、班員を守る発言や行動を取ることに気づいた。

2) 道徳での活動の工夫

① 教材の読みとり方(班での意見交換)

- ・物語のストーリーを知る
- ・登場人物等の性格や行動を知る
- ・その時自分ならどうするか、どう考えたか

・それぞれの登場人物の気持ちになって、続きの言葉を考える

② 物語の再現（班ごとで役割分担）

・それぞれの役になり話を進める

③ ほかの班との相違点を知る

④ 自分たちの考えをまとめる

⑤ 自分がしなければならないことに気づく（自分の考えを持つ）

自分の言葉でまとめる

⑥ 発表する（班で意見がまとめられるように助け合う）

苦手な子へは班の子から援助の言葉がけをする

その結果、子どもたちは、自己形成の1つを発見し、班の友だちと確かめ合い、伝え合うことができた。さらに班の友だちに自分の考えなどを認めてもらうことで、自信をもってクラス全体へ語りかけることが出来るようになった。

3) 算数での活動の工夫

【進め方】

① 基礎学習を全体で進める

② 習熟のための学習を班で進める

問題の解き方や考え方を相談し合いながら反復

ここでは、主に班の友だちと教え合い一緒に考えることや、答えあわせや、進路の競争をする子もいる。また他の班との交流をもち解き方の説明の他流試合をすることもある。予習をするものは、質問することを相談している。

③ まとめの学習をマーケット方式で進める

進度別のプリントをコーナー別に用意し、解きやすいところから挑戦させる

最後に自分が説明したいコーナーに戻り、解説をする

その結果、問題の読みとりの苦手だった子たちは、教え合える気軽さを感じ、聞き手に回ったり説明する側に立ったりしながら自信をつけてきた。わかったことを伝える喜びをもてるようになった。

算数班は、普段の生活班とは異なるので違う仲間とふれあう楽しみもあるようである。相談しながら自分の勉強をがんばる子も多い。

④ 話し合いの結果は、発表用の用紙に書いてすぐに班ごとの意見交流などに活用できるようにした

⑤ 学習の見通しが立てやすいように、単元を見通した学習計画の提示をした

4) 生活科【身近な環境を守る班活動の工夫】

公園巡りの学習の中での活動

① 行ってみたい公園とそこでしたいことを考える

② 知りたい内容の合った人たちと班作りをする

- ③ 班ごとの活動内容とルールを決め現地での体験をする
- ④ 経験できたことと自分たちがしてみたかったことが、うまく折り合えたかなど・・・について、班員全員で見直す
- ⑤ 成果の発表は絵地図や模型、案内図作りなどのアイデアを出し合う  
その結果、行きたいところやりたいこと等、学習意欲の方向が一致しているせいもあって、やる気が伝わってきた。

たとえば、「ざわざわ森」(近くの萩山公園)の班では、ヨウシュヤマゴボウ取りと牧場作りをセットにして、クヌギの新芽を守る活動をメインにしていた。

ごく自然に場所ごとに自分たちの力を出せる活動を組み入れることが出来るようになった。もちろん虫取りや鬼ごっこも十分楽しみ、班のみんなで頑張ったことが形に残り充実できる喜びを見いだしているように見えた。

## 5) 体育の表現活動での工夫

今年の運動会は、春に行われた。そこで担任の持ち上がりを見越して春休みから準備を始めた。作品は、沖縄民舞の『エイサー』。学年に踊りに堪能な人がいたので中心になって活動してもらった。

春休み中に計画したものは、パーランク作り。親子でというよりも親の力が大きかった。子どもたちは、もっぱら図面の説明係に回った。理解できない親御さんは、教え合っただけのコミュニケーションをもってくれた。

4月に入るとすぐ、実行委員を募り練習をスタートさせた。彼らは、給食の支度をしているとき、プレールームで新しいところを教えてもらい、全体指導の時に模範になったりクラスでの練習のリーダーになった。進め方は、ポイントになる踊り方にネーミングをした到達カードを作り、ひとつひとつクリアしていくというやり方を取った。

私のクラスからは、4名のリーダーが立候補した。リーダーたちは、教えてもらったところをクラスに持ち帰って、次のことをクラス全体で練習した。

- ① 素踊り
- ② 曲に合わせての踊り
- ③ 班に分かれて、練習。昼休みや放課後を利用して覚える。
- ④ 朝自習の時間に班ごとに踊りを見せ合う。
- ⑤ 授業では、全体練習と部分練習を組み合わせ班で列も組ませた。
- ⑥ 完成したところまでは、班のみんなを確認しあい合格点をだした。

この流れでスタートし練習に熱が入ったが、終わり頃になると、踊り好きな子のなかから他の班のリーダーでしっかり踊りこんでいるリーダーの姿・形に憧れ入門希望が出てきた。

その時点で、(すべての踊り方は、マスターした後だったので)踊りのベスト4を全員で選出した。そこで4人のそれぞれが得意とするところの、技を教えてもらい踊りに磨きをかけた。その間にもリーダーになりたい子や、休み時間にテープをかけて練習に励む子など気持ちが高まっていった。



パーランクのたたきところに透明のテープを張って応援して下さるお家があるかと思えば、新しい紙を張り替えて下さる方もいて文字通りの二人三脚の発表になった。

その結果、ここでの活動は、班ごとの取り組みにとどまらず親と子と教師が一つになれたようであった。

前日にいただいた子どもたちへのメッセージの励ましの言葉の一つ一つには、当日の勇壮な踊りを期待し楽しみにして下さる様子が伺えた。

学習の進行と並行して気持ちの変化も記録していき完成までの励みにしていった。それを文集にして自分たちで成し遂げたことをまとめることも覚えられた。

#### (6) これからの取り組み

① 朝の班遊び

② 親子ネイチャーワンダーゲーム

①は、班が企画するクラス遊び ②は、小平霊園の自然の探索をネイチャーゲームの手法を駆使して、親子で学習するものである。

#### (7) 保護者の反応

① クラス全体の成長を喜んでくれる父母が多い。例えば算数マーケットでは、転ばぬ先の杖になり、考えようとしている我が子につきっきりで、あれこれ注文責めをする父母もいるが、近くで学習している子の質問に快くヒントの声かけをして下さる方が多い。

② 理解不足と思われる我が子についても「あそこまで自分の思いをいえるようになった。」と喜んでくださったり、学級での取り組みについて興味を示して下さる。

③ 保護者会では、子育ての悩みを素直に伝える人、又それに親身になってアドバイスして下さる方も多くうち解けた会がもてる。

④ 月に1～2回、朝の読み聞かせの会がもたれている。回覧ノートには、作品名だけではなく工夫したところや、作品選択の理由、子どもたちの反応など細かく書かれており、初めて参加した人でも取り組めるよう工夫がなされていた。子どもたちとは、サンキューカードでコミュニケーションを図っている。

### 3. おわりに

このように、学級の中は、ユートピアを目指す生活班作りと、教科の特色を考えた班作りが、試行錯誤して存在している。その中で子どもたちは、それぞれの目的に合わせて自分の考えを持ち、伝えようと努力している。友だちと一緒に頑張ると1.5倍の力が出ることを信じている。考えも及ばなかったことが出来たりすると、自分の力に驚きの言葉を発してくれる子もいる。学級の中には、協同して活動することの良さが満ちあふれている。

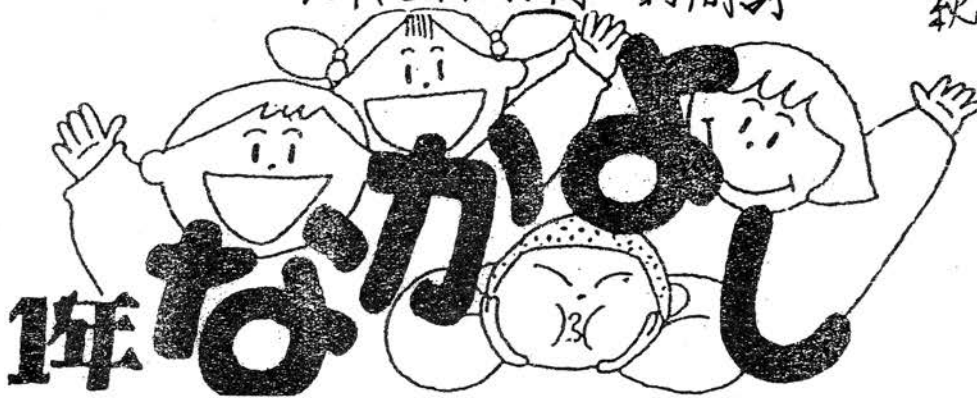
< 参考資料 >

東京都東村山市立 萩山小学校 1年学年だよりに (抜粋)

- ・毎週末に発行
- ・1年、3クラス、同一時間割

萩山小学校  
1年学年だよりに

平成14年  
(2002年)  
2月1日(金)



がくしゅうよてい

	じかんめ 1時間目	じかんめ 2時間目	じかんめ 3時間目	じかんめ 4時間目	じかんめ 5時間目
12日(火)	こくご ことばのあそび	さんすう たしざんと ひきざん	せいかわ むかしあそび	がっきょう かつどう	
13日(水)	こくご ことばのあそび	さんすう たしざんと ひきざん	たいいく (たいいくあそび)	おんがく	たてわり かつどう きょうしゅくかい
14日(木)	さんすう たしざんと ひきざん	1ヶ 科 国語 2ヶ とし 3ヶ おんがく	ずこう 6年生との	ずこう おもい出づき	
15日(金)	1ヶ おんがく 2ヶ こくご 3ヶ こくご	たいいく (こうてい)	1ヶ こくご 2ヶ おんがく 3ヶ こくご	さんすう たしざんと ひきざん	

1の2  
バイキング  
きょうよく



## 第2分科会

### [発表主題と提案者]

未来を創造する力を育てる社会科学習  
—— みつけようぼくたちわたしたちのみち ——

愛知県春日井市立柏原小学校 今田宗孝

### 算数科における学習指導の改善

東京都練馬区立光が丘第八小学校長 荒木正志

### [助言者]

伊藤康児 (名城大学教授)

関田一彦 (創価大学助教授)

根深得英 (東京都中野区立第一中学校長)

### [司会者]

坂水尾祐文 (東京都青梅市立泉中学校教頭)

### [記録者]

岡野雅宣 (東京都青梅市立泉中学校)

# 未来を創造する力を育てる社会科学習

～見つけよう！ ぼくたち・わたしたちの「みち」～

愛知県春日井市立柏原小学校 今田 宗孝

## 1 主題設定の理由

移り変わりが激しい現代社会において、主体的・創造的に活動していく力となる「生きる力」の育成が数年来求められている。その「生きる力」を育成するためには、①「共存」「地球市民」というグローバルな概念、②未来社会の設計者としての「主権者意識」、③価値観が多様化する社会において自ら判断する「意志決定能力」とそれを内包する「自己教育力の育成」が大切であると考えた。そこで、この三つを基軸とする資質・能力を「未来を創造する力」と名づけ、社会科で育成すべき「生きる力」の骨格と位置づけた。

本研究では、「未来を創造する力」を育成するために、“社会科”を初めて勉強する3年生の地域学習において、実践を試みた。私はこのひとつの実践のみで、「未来を創造する力」が育成できるとは考えていない。本実践においては、小学校3年生という発達段階を考慮して、「身近な地域の中で位置・分布をとらえる」「人々の生活と地域が密着していることを実感する」「地域に生きる人々の心情に温かい共感をもつ」ことができる力の育成を重視して研究を進めた。また、これらの力を育成するために、バズ学習の手法も有効に取り入れたいと考えた。

本実践では校区の道を教材化したわけであるが、「みち」は地域の構成要素の中で重要な要素のひとつであり、その役割は多様である。「みち」は、人や物が行き交う場所であり、人と人が出会い、立ち止まればコミュニケーションの空間ともなる。そして「みち」の両側にある建物・看板・自然などによってその町の雰囲気は変わる。つまり、初めは通り道としてつくられた道が、時間を経るに従い多様な働きをもつ「みち」へと変貌を遂げているのである。

本校の子どもたちが住む柏原校区は、住宅地として計画・整備されたところであり、新しい道が多い。そこで、数十年経った校区の「みち」を核として、子どもたちに人や建物・自然などがつくり出す雰囲気を感じ取らせたい。さらに、場所や時間帯によって変わる様子や、子どもたちが知らなかった地域の姿を知る機会をもたせたい。そして、地域に対する愛着を子どもたちがもてるようにしたい。

## 2 児童の実態

本学級の子どもたちは、探検意欲や活動意欲は旺盛で、進んで様々な活動に取り組んでいる。それは、子どもたちの中から、「もっと探検したい」「自分の知らないところに行ってみよう」という意見が多く聞かれることから分かる。そして、子どもたちは校区の特色を、「家やマンションが多いところ」「お店が広い道に集まっているところ」「公園が多いところ」ととらえている。

しかし、生活科でのまち探検や、3年生の初めの校区探検では、地図を見て歩くのに精一杯で、校区の特色を大まかにとらえることはできたものの、愛着をもたせるところまでは至らなかった。

地域は人の営みと共に成長し、個性を持つようになっていく。人との関わりが希薄になっている時代だからこそ、子どもたちに「人の匂いがする地域」を感じ取らせ、地域に主体的に関わっていける力を育てていきたい。

## 3 研究目標

社会科の地域学習において、「地域を身近に引き寄せる手だて」と「発表活動の充実」を中心に指導方法を工夫改善することにより、人と関わりながら学びを進め、地域に主体的に関わろうとする気持ちを育てる。

## 4 研究の仮説

- (1) 普段何気なく通っているが、生活の中で町の景観としての意識をすることがあまりない「みち」を取り上げる。そうすることで、周りの様子に目を向けながら、「みち」と自分たちの生活（地域）との関わりをとらえることができるだろう。

- (2) 校区の様々な「みち」を知るために、班ごとのポスターセッションによる発表形式を取り入れる。そうすることで、自分が調べた内容と比較しながら発表を聞いたり、疑問点などを意見交換したりする活動から、校区に対する見方や考え方を広げられるだろう。
- (3) 発表したり聞いたりした「みち」に、その「みち」にちなんだ名前をつける活動を行う。こうした活動を通して、「みち」をより身近に感じ、自分たちが生活している校区を大切に、愛着をもたせるきっかけとすることができるだろう。

## 5 研究の内容

### (1) 学習活動の工夫

#### ア・地域を身近に引き寄せる。

校区の「みち」に注目し、気に入った「みち」を探したり、名前をつけたりする活動を行う。この活動により子どもたちは意欲的に調べ、校区の姿を再認識すると共に、地域住民として愛着をもつことができる。

#### イ 総合的な学習の時間を活用

「総合的な学習の時間」を単元構成の中に組み入れ、校区の「みち」探検や発表準備の時間に利用する。こうすることにより、子どもたちの追究活動やまとめの時間といった「学び方を学ぶ」時間を十分に確保することができる。

#### ウ 見方・考え方を広げる班による発表活動の充実

紹介したい「みち」について、班活動によるポスターセッションで意見交換をしたり、マップづくりをしたりする。この活動により、自分の「みち」と比較しながら発表を聞くことができ、地域について多面的な見方・考え方もつとすることができる。



【上空から見た柏原校区】

### (2) 学習の経過と子どもの姿

#### <第1時> このみちはどこだろう？

第1時では、校区のいろいろな「みち」の写真を見て、「どこを写したものなのか」を班で話し合った。子どもたちは、写真に写っている建物を手がかりに、「この建物は学校の近くだ」「ここは学校に行く時に通る道だ」と話しながら、意欲的に考えた。

その後、校区探検をした時のこと振り返りながら、写真の中で「校区にはないと思うみち」を選ばせた。すると、「畑があるみち」「広い空き地が写ったみち」「川沿いのみち」の写真を選んだ。

最後に、写真が地図のどこにあたるのか確かめると、全て一致する子どもは少なく、「知っていると思っていたが意外と知らないんだな」「校区のみちをもっと探検したい」といった声が班のあちらこちらであがった。



【ここはどこのみちだろう？】

#### 【 第1時の授業の感想 】

- ・ 「ここはどこだろう」と思う写真がたくさんあった。
- ・ 校区と違う公園のみちを写したものなのに、朝宮公園のみちだと思った。
- ・ 校区のみちは知っていると思っていたが、知らないみちがたくさんあった。
- ・ けっこうむずかしかった。写真に写っているみちに行ってどんな様子か確かめてみたい。
- ・ 自分は分からなかった道でも、班のみんなと話し合っただけで分かるようになった。

### ＜第2時＞ 校区のみちを調べる計画を立てよう！

第2時では、子どもたちの声に応え、前回の校区探検で行った地区の道を調べることにした。探検するにあたり、子どもたちから「みんなが知らないみちを探したい」「自分の気に入ったみちを探したい」という意見が出された。そこで、子どもたちは前回の校区探検で作った地図を参考にしながら、探検する上でどんなことに気をつけたらよいか考えながら班で話し合い、計画を立てた。

授業の終わり頃になると、「デジカメでみちの様子を撮ってみたい」「探検したみちがどこかクイズにして発表してみようかな」と探検後の発表について考える子どももいた。



【どこを探検しようかな】

### ＜総合的な学習の時間＞ みんなに紹介できるよう、「みち」を探検しよう！

探検した「みち」について発表する準備をしよう！

校区の「みち」について興味をもった子どもたちは、校区探検で行った地区を班ごとに改めて歩き、発表したい「みち」を探した。

デジカメを片手に歩いた子どもたちは、みんなが知らないようなところや自分の気に入るところを意欲的に探し、写真に収めていた。また、自分が調べているみちの近くに住んでいる人や歩いている人に「道の周りは時間によって違うのか」「この道をよく利用するのか」など聞き取り調査をした。そして、最初の校区探検では気づけなかった「みち」を利用する人や周りの建物・自然の様子・聞こえる音・交通量などを発見カードに詳しく書き込んだ。



【こんなものを見つけたよ】

#### 【探検後の子どもたちの感想】

- ・ 三丁山公園のあたりの道は、人通りが少なくとても静かだった。
- ・ 果樹園や畑がある通りがあって、驚いた。
- ・ 楽しかった。大きい道は車がよく通っていた。
- ・ お母さんが買い物に行く時の道は、探検の時は人通りが少なかった。
- ・ 道の周りにカンやペットボトルなどのゴミが捨てられていた。
- ・ この前の探検で分からなかったところが分かった。
- ・ いろいろな人にインタビューをすることができて、道の様子がよく分かった。

「みち」探検を終えた子どもたちは、調べたことをもとに、「みち」を紹介するポスターづくりをするなど発表の準備をした。改めて気づいた事がらに、子どもたちは喜びの声を上げながら取り組んでいた。

そして、自分の見つけた「みち」を発表できるように班ごとに読む練習を行った。

子どもたちは「もっと大きな声で発表した方がいいよ」「ポスターが見やすいように工夫したら」など、意見を出し合いながら、よりよい発表ができるように話し合いながら活動を行った。



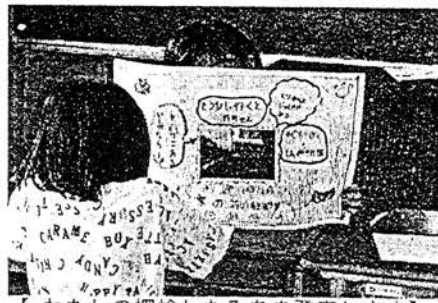
【僕の発表を聞いてください】

＜第3・4時＞ 校区の「みち」紹介をしよう！

第3・4時では、自分が発見してポスターにまとめた「みち」についてポスターセッションを行った。いろいろな「みち」を紹介し合うことで、校区にはどんな「みち」があるのか、友達が気に入った「みち」がどこで、その周りがどんな様子なのか知ることができた。

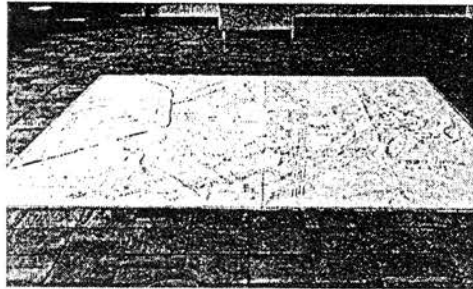
子どもたちはポスターセッション後に、「校区のあんな所に果物畑があったんだ」「友達の気に入ったみちを詳しく知ることができた」「校区にはいろいろなみちがあるんだな」と感想を述べていた。

友達同士で発表し合うことで、校区を多面的な視点で見つめることができ、共に高め合うことができた。



【わたしの探検したみちを発表します】

次に、自分が紹介した「みち」をカードに書き、拡大した校区地図の上に貼り付けた。



【こんなマップができました】

子どもたちは楽しそうな表情で地図の上を自由に歩き回り、自分の調べたみちを探したり友達のカードを読んだりした。できたマップを見て子どもたちは、「知らないみちが見つられて楽しい」「すごく大きなマップができてうれしい」などの感想を書いた。中には、「かごた公園の周りにはぶどう畑がたくさんあった」「木がかたまっているとところがある」など、自分が知らなかった校区の特色に気づく子どももいた。

＜第5時＞ 校区の「みち」に名前をつけよう！

第5時では、今までの学習をもとに、校区の場所による様子の違いを知り、校区の「みち」に名前をつける活動を行った。

初めに、マップを囲んで「みち」の周りには何があるのか調べた。そして、田畑や店・くだもの畑が集まっている場所を確認し、探検をした朝方と夕方の様子の違いなどについて知る機会をもった。次に、様子の違いや「みち」の周りにあるものをもとにしながら名前を考えた。子どもたちは、カードを書いた友達に「みち」の様子について改めて聞き直したり、考えた名前を見せ合ってお互いに検討し合ったりした。



【どんな名前をつけたらいいかな】

【子どもが考えた「みち」の名前とその理由】

- |             |                               |
|-------------|-------------------------------|
| ・ おいしいみち    | …ぶどう畑やもも畑などがあるから。             |
| ・ リラックス通り   | …みちの周りがずいぶん静かだから。             |
| ・ かいものみち    | …店がいっぱいあって、買い物に行くときに通るから。     |
| ・ 思いやり通り    | …ぶどう畑でおばさんがぶどうを心をこめて育てているから。  |
| ・ ワンワンロード   | …犬を散歩している人がよく通っているから。         |
| ・ 友達ロード     | …その道を行くと、友達とよく遊ぶ公園にたどりつくから。   |
| ・ 親子のみち     | …保育園のそばで、お母さんと小さい子がよく通っているから。 |
| ・ 自然いっぱいのみち | …田や畑・木があるところが集まっているから。        |

授業の最後に、「今まで学習してきて、校区に対してどのように思うようになったか」考え、ワークシートにまとめた。子どもたちは校区について再認識したことや「こんな校区になって欲しい」という願いを次のように書いた。(学習のまとめ参照) 授業後、子どもたちは「いろいろなみちに名前

をつけたい」「もっといい名前がないか調べたい」と感想を述べていた。中には「学校のホームページで紹介したい」「他の人に自慢できる校区にしたい」と話す子どももいた。

#### 【 学習のまとめ 】

- ・ 校区にくだもの畑があるとは思いませんでした。
- ・ 工場や田畑がたくさんあって驚きました。
- ・ 店の近くは休みの時と平日の夕方は車が多いことが分かりました。
- ・ リラックス通りがもっとたくさんあったらいいなと思いました。
- ・ 三丁山公園のそばのみちは人通りが少なくさみしいので、にぎやかになったらいいなと思いました。
- ・ 自分が見つけたみちの名前が本当についたらいいなと思いました。
- ・ 校区は木が少ないので木がもっといっぱいになったらいいな。

## 6 研究の成果

- (1) 普段何気なく通っているが、生活の中で町の景観としての意識をすることがない「みち」を取り上げることで、自分たちの生活との関わりをとらえることができるだろう。

子どもたちは、今まで道を意識して見ることがなかった。しかし、自分たちが普段通っている道とは全く違う場所があることや、時間帯によって「みち」の様子が変わることを知り追究意欲をかき立てられたようである。

そのため、校区を「みち」を視点にしてとらえ直した本実践は、子どもたちは地域を身近に感じ意欲をもって学習に取り組めるものであったといえる。

また、探検活動や聞き取り調査を行う過程で、みちの景観や雰囲気は人々の営みによりつくり出されており、生活と深い関わりをもっていることを知ることもできた。

- (2) 校区の様々な「みち」を知るために班でのポスターセッションを取り入れることで、校区に対する見方・考え方が広げられるだろう。

本実践では、ポスターセッションという形式で班の仲間同士の意見交換を行った。この活動を行うことで発表者の立場に立った場合、デジタルカメラで撮った写真を見せながら「みち」の詳しい状況をしっかりと説明することができた。

逆に聞き手の立場に立った場合、興味をかき立てられる「みち」を自由に選び、発表者と意見交換しながらじっくりと校区の「みち」について知ることができた。

こうした子ども同士で教え合う活動を通して、様々な場所による校区の違いについて知ることができ、校区に対する見方や考え方を広げることができた。

- (3) 「みち」に自分達の思いを込めた名前をつけることで、校区を大切にし愛着をもたせるきっかけをつくることができるだろう。

探検やポスターセッション、マップづくりを通して「みち」の特色をとらえた子どもたちに、その場所にちなんだ名前をつけさせた。子どもたちは、その「みち」の周りにあるものや肌で感じ取った雰囲気、発表を聞いてできたイメージを基にして意欲的に考えることができた。

こうした活動を通して、今までは「道なんて気にしたことがない」と言っていた子どもたちが、「この道を通ってみたい」「みんなにもこの道のよさを知ってもらいたい」という感想を述べるようになった。

さらに、聞き取り調査などで地域住民の声を聞く機会をもったことで、その人達の思いを取り入れながら、「校区をもっとよいものにするにはどうすればよいか」自分なりの意見をもつことができるようになった。

## 7 今後の課題

本実践では「みち」を通して校区を見つめ直し、知らなかった一面を再認識させると共に、地域に対して愛着がもてるよう授業を構築した。特に人との関わりの中で、地域を知り、そこに住む人たちの思いを感じ取ることにより、「もっと知りたい」「もっと関わりたい」という気持ちを膨らませることができたと考える。

さらに、人々との関わり合いや友達同士での学びを大切に学習活動を積み上げ、「未来を創造する力」を育てていきたい。



<資料> 本実践の授業展開 12時間完了(総合的な学習の時間7時間)

時	児童の学習活動	留意点・資料
	<p><b>この「みち」はどこだろう?</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校区の「みち」を写した写真が地図のどこにあるのか考える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 柏原小学校の近くにある大通りだ。</li> <li>・ 校区の公園がある道だ。</li> </ul> </li> <li>① ・ この写真はどこだろう。</li> <li>○ 校区探検した時のことを思い浮かべ、写真の「みち」と比べて気づいたことを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 写真の「みち」よりも校区の道は広がった。</li> <li>・ 校区の道には家やマンションがたくさんあった。</li> </ul> </li> </ul>	<p><b>「みち」の写真</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師が用意した写真を提示する。</li> <li>・ クイズ形式で写真の「みち」はどこか当てさせる。</li> </ul>
	<p><b>校区の「みち」を調べる計画を立てよう!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校区地図を見てどの「みち」探検をしたいか計画を立てる。</li> <li>② ○ 探検をする時に気をつけること、探検後の発表について考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 探検の班は前回の校区探検の班で行う。</li> <li>・ 看板や周囲の様子にも注目させる</li> </ul>
<b>総合的な学習の時間</b>		
	<p><b>みんなに紹介できるよう、「みち」を探検しよう!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>4 時 間 ○ 各地域に分かれて、自分の気に入った「みち」を探す。</li> <li>○ 周囲にある看板や建物・自然についてデジカメで撮ったり、発見カードに書いたりする。</li> <li>○ 気になったことや分からないことについて、周囲の人に聞き取り調査をする。</li> </ul>	
	<p><b>探検した「みち」について発表する準備をしよう!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3 時 間 ○ 探検したことをまとめる。</li> <li>○ 自分の気に入った「みち」や発見した「みち」について発表できるよう、ポスターづくりをする。</li> <li>○ ポスターセッションができるよう、班ごとに練習する。</li> </ul>	
	<p><b>校区の「みち」紹介をしよう!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 各地域ごとに自分が好きな「みち」などについて、ポスターセッションを行う。</li> <li>③ ・ 友達とよく遊ぶ公園がある「みち」</li> <li>・ 果物畑がある「みち」</li> <li>・ 川が流れていて魚を見ながら歩ける「みち」</li> <li>④ ・ お寺や神社がある静かな「みち」</li> <li>○ 発表した「みち」の紹介カードを書く。</li> <li>○ 校区の「みち」マップをつくる。</li> </ul>	<p><b>拡大した校区地図</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 班を半分に分け、時間で発表者と聞き手を替える。</li> <li>・ 「みち」のどんなところを紹介したいか理由をはっきりさせる。</li> </ul>
	<p><b>校区の「みち」に名前をつけよう!</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ マップを見て、校区の「みち」の特徴をとらえ、場所によって様子に違いがあることを理解する。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 田畑がいっぱいある。</li> <li>・ 果物畑も広がっている。</li> </ul> </li> <li>⑤ ○ クラスで話し合い、自慢したい「みち」に名前をつける。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 果物の木があるので「フルーツ通り」</li> <li>・ 魚がいるので「おさかな通り」</li> <li>・ 友達の家の近くなので「ルンルン通り」</li> <li>・ 人が多く通るので「にぎやか通り」</li> </ul> </li> <li>○ 校区に対する思いをまとめる。</li> </ul>	<p><b>みちマップ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ なぜその名前をつけたのか理由も書かせる。</li> </ul>

# 算数科における学習指導の改善 Part 3

東京都練馬区立光が丘第八小学校 荒木 正志

## 1 今回の学習指導の重点

生涯学習の目標を「人間味あふれる」「自ら考え、自ら判断し、自ら選択し、自ら行動し、自ら修正し、自ら責任をとることができる」ととらえる。これが「生きる力」となる。小学校段階で「生きる力」を身に付ける必要はない。この力の基礎となる学習指導の在り方を探っていきたい。

生きる力を育んでいくためには、基本的に次の2点の前提から教育活動を進めていく。

- ① 教育の基盤は、信頼に支えられた人間関係である
- ② 学習指導の基盤は、学習者の学習意欲の喚起から始まる

この原則に立って学習指導を進めるには、次の2点の学習環境をつくっていきたい。一つは、人が人間として社会に生きるとき、互いの存在を認め合い、共に生きていこうとする関わり合いを大切にしたい。「人間味あふれる学習環境」である。二つ目は、学ぼうとする姿勢を培っていくことを大切にしたい。「学習者の学習意欲を引き出す学習環境」である。この二つの環境の中で、学習指導を進めていくけば、小学校段階での生きる力に近づけると考える。

## 2. 人間関係を作り出す環境と学習意欲を引き出す環境

### (1) 2つの環境の必要性

「学び」は自分の中で学ぼうとする意識がある所で行われると考える。乳幼児のころから人間は知的好奇心の塊とも言われるが、小学校入学時には行動が受身的な子どもも見られる。これは、知的好奇心を発揮する体験が少ないのかもしれない。または知的好奇心が初めからないのではなく、生活体験の中で失敗したり、嫌な思いをしたため自信を失っているかもしれない。

前者の場合は、興味関心が持てる学習環境をつくり、成就感、満足感を味わうことで知的好奇心は取り戻せると考える。また低学年で隣の子どもの操作方法を見てから真似をし、同じだと安心する姿を見ることがある。学ぶという学習意欲を引き出すには、この意欲を持つ前に、「真似をして安心する」という場面もあるように思われる。

後者は、算数の好き嫌い調査を行うと、できないから嫌いのほか、間違えるのが恥ずかしいというのがあることから推察される。この場合は学習に臨むときに学習者が安心感をもてるような人間関係を構築していくことで知的好奇心を取り戻せるのではないかと考える。

### (2) 信頼に支えられた人間関係づくり

「教育は児童理解に始まり、児童理解に終わる」と言われる。一人一人のプロセス

に合った指導を進めることは難しいかもしれないが、一人一人を理解しようと努力することはできる。また人の心を十分理解することはできなくても、その人の心に共感することはできる。この中で人と人の信頼関係は生まれてくると信じている。そのためには、次の点に留意していきたい。

①子どもを育てる力をもつ

- ・子どもを感じる心
- ・子どもをみつめる目
- ・子どもを育てる技

②ほめる観点と叱る観点を明確にする

③人間的ふれあいに根ざした児童理解をする

- ア 子どもの心を敏感に察しようとする
- イ 子どもを柔軟な見方で見ようとする
- ウ 子どもと焦らず接しようとする
- エ 子どもに期待を持って関わろうとする
- オ 子どもを素直に見ようとする
- カ 子どもに温かい関心を持とうとする
- キ 子どもと共に歩もうとする
- ク 子ども一人一人の身になってみようとする
- ケ 子どもの良いモデルになろうとする
- コ 子どもに厳しく接しようとする

(3) 学習者の学習意欲の喚起

学習意欲は、興味関心、安心感、欲求を充足できたときなどに湧きたってくると考える。従って次のようなとき「自分なりに実行しているとき」「自分なりに努力しているとき」「自分なりの発想をしているとき」「人のためにつくしているとき」「やらされるよりは自分でしているとき」認め、賞揚するよう配慮していきたい。

叱られたり罰を与えられることで躰られた子どもは、叱ったり罰を与える人がいなくなれば、いままで制御していた行動を起こす。これは押さえていたバネが突然はじけると同じである。わきあがる衝動が抑えられないのであるから行動の善悪も判断できないし、責任をとることもできない。

さらに子どもの行動をあれこれ禁止していると、何もしない子ども、何事においてもなげやりな子どもができあがる。当然自分の行動は、「やらされている」と考えているので、責任はとらない。自分で行ったことは、自分で責任をとれるようにすることが、生きる力につながっていく。ここでは、自力で問題を解決することである。

### 3. 学習指導の工夫について

(1) 学習システムの枠組みをつくる

学習指導を構築していくとき、指導者の成長を更に期するという観点から、Plan、Do、See の発想で学習指導システムを考えていく。

(2) 学級目標、個別目標の工夫

プリテストを基に、大まかな学級の目標(態度、考え方、人間関係など)をたてる。個別目標は、(学習内容が理解されていると思われる子)(学習が進むにつれて理解が深まると思われる子)(これから大きく伸びる可能性を秘めていると思われる子)の3つにわけて考える。また個別の目標では、プリテストでできていないところもチェックしてくようにする。

(3) 学習形態(Learning Type)の工夫

今回の学習形態は、その中の「一斉指導に個別指導をおりませた指導 A」と「一斉指導に小グループ指導をおりませた指導」を取り上げる。

(4) プレイシート(Play Sheet)の工夫

一般にはワークシートといわれるものである。Workは、課題としての性質を持ち、多くは強制されて行うものである。その過程より結果が重視される。それに対してPlayは、面白いと感じられる活動で、自発的になされ、活動そのものを楽しむことを目的とした活動である。特にこだわることもないが、自分で楽しめるノートになってほしいという願いである。ノートは、ホワイトシートが望ましいが、まだノート指導が十分ではないので、意図したシートを利用する。

(5) 相談タイムの工夫

① 進路選択表

問題を解決するとき、通常の問題解決過程に沿って行う。ただ単元導入時や既習事項を想起しにくいと判断したときは、相談もできる進路選択の学習形態を取り入れる。進路選択表は次の表を利用する。

解決できた			まだちょっと		
自信あり	ちょっと心配		自信あり	ちょっと心配	
教えたい	教わりたい	できたどうして 相談したい	一人でもう 少しやりたい	心配どうして 相談したい	教わりたい

(6) 評価(Evaluational)の工夫

① 指導者による評価

学習前に子どもの解決の様子を予想していく。概ね三通りに分類していく。学習中のチェックとPSのチェックをしていく。積み重ねるうちに予想は子どもの実態に近い

② 子どもによる評価

学習の後の評価は、発見(がんばっていた人発見、自分の考え発見)、感想、満足度曲線について自己評価する。

発見	満足度	100	50	0	時間
感想					

③ 子どもの発言の後の評価の工夫

子どもの発言の後に、どういう状況での発言だったのか評価していくようにする。

(7) 素材の選択の工夫

学習意欲を喚起する素材を提示していくことが大切である。練馬新算数教育研究会では、単元導入時に提示する素材の要素について定義している。この要素を数多く満たしているものが「よい素材」と考えることができる。

(8) 発問の工夫

発問については、次のことに留意していく。(算数科の発問の仕方と工夫 I 授業中の教師の発言 荒木 東洋館 平成2年)

(9) 学習指導分析(See)の工夫

① 毎時間の学習指導分析

単元を通しての分析も考えているが、今回は毎時間の指導者による自己評価を行い、次時または次単元への指導の助けとなる資料を作っていく。

② 単元を通しての学習指導分析

○ S-P 表による分析(Student-Problem)

○ 満足度曲線の分析

学習中の時間の経過とそのときの満足度をグラフに表したものである。満足度は0%、50%、100%の3種類にする。



(10) 机間指導の工夫

机間指導は意図して行っていきたい。それは、助けを求める子どもを早く発見していくためである。子どもが自力解決を始めてから指導者がチェックしていくと通常4

0人学級では約15分ぐらいかかる。全員の考えを理解しようとする時間が不足する。そこで、継続して観察していくことを考えれば、1単位時間で評価できなくてもよいと考える。第二時までチェックできない子どもがいたら、第三時には初めにチェックしていけばよいのである。チェック表は、次の項目を入れる。

NO	反応	学習中	学習後	プレイシート
214	1②3		②	
513	①23	②		
862	12③		②③	途中で停滞傾向

#### (12) 板書の工夫

子どもの思考や学習過程を振り返り易くするために、黒板左から右へ学習過程にそって板書していく。子どものネームカードを利用していく。板書計画を立てる。

#### (13) 学習環境の工夫

学習環境は広い範囲で考えられるが、ここでは、移動黒板を利用して算数・数学的なアイデアを掲示するコーナーと各時間の学習のまとめを掲示するコーナーをつくる。

またプレイシートを冊子化していくことにより、振り返りしやすいようにしていく。指導者の意図に近いプレイシートは、全員に増し刷りして配布する。これにより、シートの書き方がかわってくることで、その時間の欠席者が学習内容を少しでも理解することにつながる期待もある。

### 4. 実践

#### (1) 単元名 比例

#### (2) 単元の目標

比例する伴って変わる2つの量の関係についてわかり、その関係を表から読み取ったり、式やグラフに表して、その特徴を読み取ったりする能力を伸ばす。

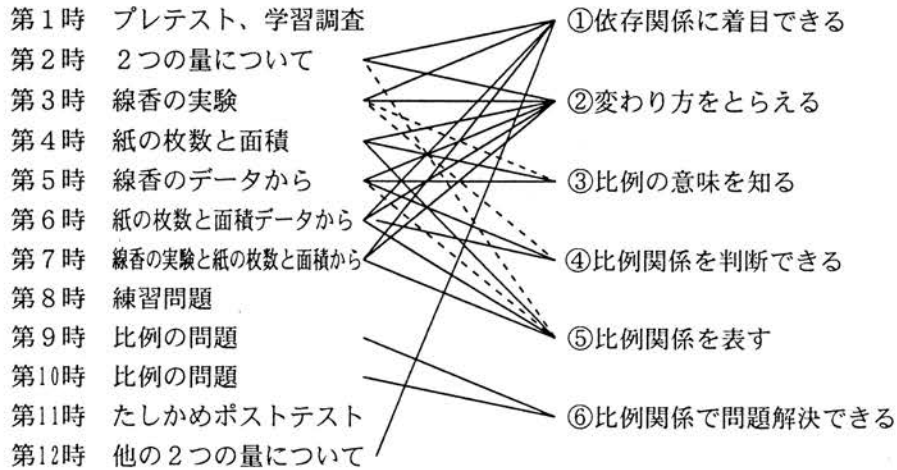
#### (3) 教材について

ここでは、比例の意味を知り、簡単な場合について式やグラフを用いて比例関係の特徴を知ることがねらいである。またここでの学習を通して、伴って変わる2つの数量についての関係を考察する力を伸ばしていくことが大きな目標となる。

このねらいに基づく内容は、次の6つあると考える。

- ① 依存関係に着目することができるようにする
- ② 変わり方をとらえることができるようにする
- ③ 比例の意味を知らせる
- ④ 比例の関係にあるかどうかの判断ができるようにする
- ⑤ 比例関係を表すことができるようにする
- ⑥ 比例関係を使って問題解決できるようにする

(4) 学習指導計画



5. 今後の課題

満足のいく学習指導を行うことは、至難の業とまた痛感した。「為すことによって学ぶ」ことは今回もたくさんあった。反省を生かし、次の実践を探っていきたい。

- (1) 問題を解決するとき、子どもが安心感をもっていると、学習意欲は向上することが今回の実践からも明らかになった。今回指導者に対する「同一視」の傾向が強ければ、学習意欲はさらに高まると考えていたが、十分見とれていないので再度挑戦してみたい。
- (2) 集団解決のよさを生かした指導と個人解決のよさを生かした指導の組み合わせは、学習効果がありそうである。低学年での実践や何単元か続けた実践をしていきたい。

## 第3分科会

### [発表主題と提案者]

全員参加の授業を目指して

東京都東村山市立東村山第三中学校 青 森 一 博

基礎・基本が確実に定着する授業

岐阜県土岐市立泉中学校研究推進委員会  
長 瀬 教 行 ・ 古 川 稔 彦

### [助言者]

安 永 悟 (久留米大学教授)

竹 下 英 二 (福島大学教授)

荻 原 克 巳 (元南山大学教授)

### [司会者]

長谷川 修  
(東京都東村山市立東村山第四中学校教頭)

### [記録者]

志 賀 仙 長  
(東京都東村山市立東村山第四中学校)



## 全員参加の授業を目指して

東京都東村山市立東村山第三中学校 青森 一博

～はじめに～

昨年度から、バズ学習研究会に参加させていただいております。教員2年目というこの時期に、研究発表をさせていただける機会を持って大変光栄に思っております。

私が目指す授業の1つに、全員が主体的に活動する。という目標があります。今回は、現在行っている授業実践を通して、失敗談や成功談を報告させていただきます。今後の自分自身の授業づくりの改善へむけて大いに勉強したいと考えておりますので、よろしくご指導お願いいたします。

### 1. 主題設定の理由

「全員参加の授業」とはそもそもどういう授業なのかということを考えてみた。一斉授業の多くに見られる“教師の教え”だけの授業では、ただ、教室でノートをとったり、問題を解いたりしているだけになりがちで、自分の考えを生かす場とはなりにくい。それが現在の“数学嫌い”の増加につながっているのではないか。自分たちで様々な事柄を発見していくという数学の醍醐味が失われ、解法を覚えて問題を解くための授業になっていないかということ考えた。生徒が能動的に活動する授業、つまり全員の考えが生かされる授業づくりこそが「全員参加」につながるのだと思う。

そこで、生徒一人一人の考えが十分生かされる形として小集団の学習グループを作ることを目指した。東村山三中では、昨年度から数学科において少人数制授業を行っている。昨年の1年生では“2学級3分割”の少人数制授業を導入した。

1クラスの人数が少なくなることにより、生徒個人の考えをより明確に授業の中に生かすことができる。そうすれば生徒一人一人が主体的に授業に参加しているという実感を持たせることができると考えた。

もちろん、生徒に主体的な活動をさせるためには教師の働きかけは不可欠である。教師のこういった働きかけが生徒を主体的に動かすのかということの研究しようということからこの主題を設定した。

### 2. 研究の目標と達成への手だて

生徒の考えがいかされた授業を展開しているかを考える。生徒個人の考えが授業にいかされることを目指す。

生徒一人一人の考えをいかすということは、それぞれの考えを全体で認めその考えをもとにして授業が展開されているという実感を生徒が持つことにある。

その目標への手だてとして、私は授業には次の4つが必要であると考えた。

①テーマが生徒たちに興味を抱かせるようなものであるか。

- ②生徒たちが自分たちの考えをもてるような場があるか。
- ③自分の考えや他者の考えをお互いに認め合う場があるか。
- ④生徒たちからでた考えが授業を展開させているか。

子どもたちが持つ“知的欲求”はとても高い。興味・関心を持ち、自分の考えを持つことは学習の第1歩となる。そして、自分の考えを持つとその考えを他者に伝えたいという欲求が生まれる。また、他者がどう考えているのだろうかということにも興味を持ち始める。そこでの共通点や、相違点をお互いに確認し合うことで新たな考えも生まれる。そういう交流を進めながら、自分たちの考えをもとにして授業が展開されれば興味はさらに深まり学習意欲も高まっていくのではないかと考える。

### 3. 授業の展開例

#### ①単元名

第1学年 量の変化と比例

#### ②単元について

本単元は中学校で学習する数量分野の基本となるものである。具体的な事象の中にある2つの数量の変化や対応を調べることを通し、比例、反比例について考察する。これらの学習を通し、比例、反比例の関係を見だし表現し考察する能力を伸ばす。

比例、反比例の学習は、実生活において数量を関係的に探求する基礎となるものである。これらの学習においては、一般的、形式的に流れることなく、具体的に事象を考察しながら、数量の関係についての理解を深められるようにすることが必要である。今回は、子どもたちの親しみやすい玩具を教材として使い、伴って変わる2つの量を実験しながら理解するということから始め、具体的な例をもとにしなが比例、反比例とはどういうものなのかということを考えていくことにする。

関数とは、1対1対応で2つの数量が変化するものだという考えをしっかりとおさえ、第2、3学年の1次関数、2次関数へつなげていきたい。

#### ③単元の目標

**具体的な事象を調べることを通して、比例、反比例の見方や考え方を深めるとともに、数量の関係を表現し考察する力を養う。**

小学校においては、関数的な関係を表やグラフなどによって考察したり、数量の関係を調べたりして、数量の関係を考察や処理に表やグラフなどを有効に用いたりすることが学習されている。

中学校第1学年では、小学校における伴って変わる二つの量の関係の見方や考え方を深め、具体的な事象の中にある二つの数量間の変化や対応について考察し、比

例や反比例の見方や考え方ができるようにする。このような具体的な事象における変化の考察に際して、数量の関係を自ら見だし、それをを用いる能力をのばす学習は、第2、第3学年の関数の内容にとどまることなく、図形についての考察の場面においても、こうした関数的な考え方が活用され深められることになるので、本単元において多くの具体的な事象を観察し、二つの量の関係を処理できる力を養いたい。

④指導計画 (1/12)

節	項	指導内容
量の変化	1 ともなって変わる二つの量	・ともなって変わる量を実験によって理解する。
		・ $y$ は $x$ の関数であることの意味 ・変域の意味、変域を数直線を使って表す
比例と反比例	1 比例	・比例の関係を表す式とその特徴 ・比例定数が負の数の場合の比例関係
	2 座標	・座標の意味
	3 比例のグラフ	・比例の関係を表すグラフとその特徴 ・比例のグラフのかき方や関数の式の求め方
	4 反比例とそのグラフ	・反比例の関係を表す式、グラフとその特徴

⑤第1時間目の指導

(1)本時のねらい

- ・簡単な実験を通して、ともなって変わる2つの量を観察し考察することへの関心を持たせる。
- ・関数という言葉を理解する。

(2)準備

- ・ワークシート ・電車のおもちゃ ・ストップウォッチ

(3)展開

段階	教師の指導	授業中の生徒の活動及び反応	留意点
導入 8分	電車の進んだ距離と時間の関係を調べる実験を行う。		
	<u>本時の授業の説明</u>		
	<u>実験の手順の説明</u>		
<p>おもちゃを使って数学しよう！</p> <p>&lt;用意する物&gt;電車のおもちゃ、ストップウォッチ、プリント</p> <p>&lt;手順&gt;1. レールを組んで、電車を走らせる。</p> <p>2. 4周程度走らせてから印を付けた所に来たら、ストップウォッチを押して1周のタイムをはかり、プリントの表に書く。</p> <p>3. 2周、3周…5周まで繰り返す。</p> <p>4. 表を見ながら気づいたことを班で話し合いワークシートに書く。</p>			

<p>展開 I 20分</p>	<p>プリントを配る <u>実験を始めさせる</u> グループ指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実験をしながら気づいたことがあればワークシートに書いていかせる。</li> <li>・周と時間の関係について考えているかを確認する。</li> <li>・気づいたことが1つ出たら、それで満足してしまうことがないように、できるだけ多く気づいたことを考えさせるようにする。</li> </ul>	<p><u>実験を行う</u> 各グループ用具をそろえ、それぞれ活動を始める。 それぞれ係に分かれて、分担して活動をする。 <u>班ごとに話し合う</u> &lt;予想される生徒の気づき&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・1周よりも2周の方が時間がかかる。</li> <li>・2周にかかる時間は、1周にかかる時間の約2倍、3周では約3倍になっている。</li> <li>・表の上(周)÷下(時間)の値がだいたい〇〇になっている。</li> <li>・周÷時間が一定になっている。</li> <li>・時間÷周が一定になっている。</li> <li>・周と時間の比が一定になっている。</li> <li>・時間と周はともなって変化している。</li> <li>・表の上(周)が2倍、3倍になると、下(時間)も2倍、3倍になっている。</li> <li>・時間と周は比例関係である。</li> <li>・時間は周に比例している。</li> <li>・周は時間に比例している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・負の数の場合へ拡張させるために実験をビデオで撮影しておく。</li> <li>・十分にグループ活動の時間をとる。</li> <li>・後で、負の数の場合へ拡張させるために4周まず走らせてから1周のタイム、2周のタイム…を計ることが理解できているかを確認する。</li> <li>・グループを回りながら子供がどんなことを気づいたかをメモしておき、発表でいかす。</li> <li>・少しつっこんで、比例という言葉を考えさせてもよい。</li> <li>・子供達に発表させたいたので、教師は発言を繰り返す程度にとどめておく。</li> <li>・なかなか発表が出てこなかったら、メモしておいた子供達の気づきを利用する。</li> </ul>																					
<p>展開 II 15分</p>	<p><u>それぞれ気づいたことを発表する。</u> <u>気づいたことを発表させる</u></p>	<p><u>気づいたことを発表する</u> 予想される生徒の気づきのような発表がでる。</p>																						
	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">班</td> <td colspan="5"></td> <td style="text-align: right;">&lt;気づいたこと&gt;</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">周</td> <td style="text-align: center;">1</td> <td style="text-align: center;">2</td> <td style="text-align: center;">3</td> <td style="text-align: center;">4</td> <td style="text-align: center;">5</td> <td></td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">時間</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>		班						<気づいたこと>	周	1	2	3	4	5		時間							
班						<気づいたこと>																		
周	1	2	3	4	5																			
時間																								
<p>まとめ 7分</p>	<p><u>時間と周が伴って変化しているということを強調する。</u> <u>今日のおさらい</u> <u>本時の授業をまとめる</u> <u>“走った時間は、走った周の関数である”</u></p>																							

(4)評価

- ・グループで協力して実験を行いながら、時間と距離とのいろいろな関係に気づく。
  - ・2つの量が伴って変化しているということに気づく。
  - ・関数という言葉を理解する。
- (“走った時間は、走った周の関数である”ということが理解できていればよい)

<ワークシート>

# 数学プリント

関数～おもちゃを使って数学しよう！～

おもちゃ（電車）を使って、電車の進む距離と時間の関係を調べてみよう！

<用意するもの>

電車のおもちゃ・レール・ストップウォッチ・ワークシート・筆記用具

<手順>

- ①トラックのような形に組んだレールに電車を走らせます。
- ②スタートラインに電車がきたら、ストップウォッチをおします。  
(あらかじめ4周は走らせること)
- ③1周するのに何秒かかったかを調べます。
- ④2周するのに何秒かかったかを調べます。

⋮

5周ぐらいまでをそれぞれを表にまとめ、気づいたことをワークシートにまとめる。

<表>

走った周 (周)	1	2	3	4	5			
かかった時間 (秒)								

<気づいたこと>

それぞれの気づいたことをいくつかまとめてください

1年 組 番氏名

(班員: \_\_\_\_\_ )

#### 4. 実践における今後の課題

今回の実践例は、あまりうまくいかなかった。その原因として、いくつかあげられる。

- ・テーマ設定が不十分であった。

電車の進んだ距離と時間の関係という、限られた内容での授業になってしまい、生徒達にあまり発想を持たせることができなかった。“2つの量が伴って変わっている”ということよりも先に“比例関係”を発想する生徒の方が多かった。

- ・グループでの話し合いがうまく展開されなかった。

生徒達が“何を話し合えばいいのか”というポイントをしぼることが出来ず、うまく意見交換が出来なかった。

- ・グループでの話し合いを、全体発表にいかすことができなかった。

テーマ設定が2つの量の変化を探るという内容であったために生徒の発想を妨げてしまった。「電車を走らせることによって、どんなことが変化しているのか、また、変化しないものは何なのか」という内容にすればもっと生徒達の考えを多く授業に取り入れることが出来たのではないかと思う。また、グループ活動においても、教師の側から役割分担をしっかりと意識させる指導をした方がうまく進んだと思う。全体発表においては、各班1つずつ発表してもらったため、個人個人の考えを全体にいかす工夫が出来なかった。今後は、各班に個人個人の考えを紙にまとめてもらい、それを黒板に貼って全員で確認するという場を設けていくことで個人の意見が生きてくると思う。

～おわりに～

授業を終え、何人かの生徒に授業の感想を聞いてみるとこんな言葉が返ってきた。

「おもちゃを使って勉強することは楽しかった。けれど、何を話し合っているのかわからなかった。」

生徒達にテーマをしっかりと理解させ、様々な考えを持たせるためには、教師の側も主体的に指導することが大切である。生徒達が発想しやすい、そして考えを交流しまとめていけるような場をさらに研究していくことが今後の課題である。

# 基礎・基本が確実に定着する授業

岐阜県 土岐市立 泉中学校  
研究推進委員会 長瀬教行 古川稔彦

## 1 はじめに

1次方程式の計算も大づめになってきて、応用問題を解く機会が増えてきました。私は、数学が得意ではありませんが解けたときの感動は好きです。その快感が味わえるのが、少しひねった応用問題。結構楽しみです。今日の問題の中で、外側と内側の円の周りの長さが等しいというのには意外でした。私は、外側の円周の方が長いかなあと思っていたけど、本当は、同じ長さでした。人の目はあてにならないものだと、つくづく思いました。

授業の振り返りとしてこの文章を書いたMさんは決して数学が得意な生徒とはいえない。しかし、思いや願いをもってひたむきに取り組み、日々、自己を振り返ることで少しずつ自信をつけ、確実に学力をつけてきた生徒の一人である。

我々、教師の使命は、基礎・基本となる授業内容を教え込むのではなく、「もっと知りたい」「わかるようになりたい」という子どもの願いや思い、「どうしてなんだろう」といった疑問から生まれる知的好奇心をゆさぶり、その教科の本質にある学ぶ楽しさや、わかる喜びを味わわせ、一人一人に確かな学力をつけていくことであると考えている。

## 2 主題設定の理由

ここ数年は、生徒の希薄な人間関係を修復するために「よりよき個人はよりよき集団を形成し、よりよき集団はよりよき個人を形成する」を基本理念とする「バズ学習」をあらゆる教育活動に位置づけてきた。こうした私達の教育の営みが効を奏して、生徒の間に協同して活動に取り組む姿勢が表れ始めてきた。近年は、教科の特性を生かし、意図的・計画的に取り入れた「バズ学習」を研究の柱として、全国バズ研究大会や東濃地区中学校研究実践交流会を通して、本校の特色である「バズ学習」を生かした教科指導のあり方を、全国や東濃地区に発信することができた。

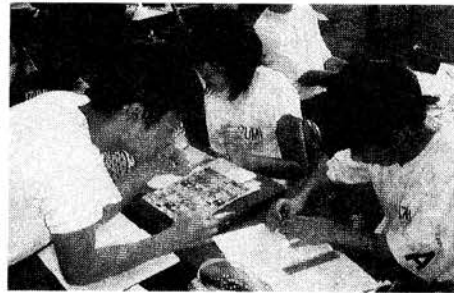
昨年度の研究は、形成されつつある「よりよき集団」から、その相互作用による「よりよき個」に焦点をあて、教科における基礎・基本を確実に伸ばしていくために、

① 指導計画の充実 ② 指導方法の工夫と改善 ③ 指導と評価の一体化  
の3つの研究内容を柱とした研究実践を進めた。その成果として、次の点があげられる。

- ・互いの授業を交流し、バズ学習をどのように進めていけば良いのかを考え合うことができた。
- ・バズ学習を位置づけた指導過程を意識し、その特性を考慮した指導計画を立案することができ、より意欲的な学習ができるようになった。
- ・教師がバズ学習を行うねらいを明確にもち、学習意欲を喚起する学習課題の設定や認知面・態度面を高めるためのバズテーマのあり方を明らかにすることができた。

- ・バズ学習を通して、自分の意見や考えを広げたり、深めたりして自己を高め、仲間とともに学ぼうとする姿勢が表れてきた。

また、課題として集団の力を伸ばすためには、授業を通して個の力をつけることや、教師の力量をより高めることが重要であると感じられた。そこで、今まで積み上げてきた諸先輩達の実践や温かい人間関係を基盤とした「バズの精神」は残し、もう一度教育の原点に戻ろうと考えた。そして、一人一人の生徒に目を向け、その教科の基礎・基本を、確実に定着させたいという考えにたどりついた。



上記のことから、今年度の本校の教科学習における願う姿は以下のように設定するに至った。

- ◎よりよく生きたいと自分自身の願い・考えを強くもち、仲間の考えを取り入れていくことで、主体的に学び、教科の本質に迫っていく姿
- ◎互いの成長及び学習集団の成長を願って、鍛え合って高まろうとする姿

### 3 研究主題及び研究仮説

〈研究主題〉

## 基礎・基本が確実に定着する授業

〈研究仮説〉

基礎・基本を明らかにし、意欲をもたせる学習活動を展開し、多様な評価を行えば生徒一人一人の基礎・基本が確実に定着する。

#### (1) 研究内容1 基礎・基本の明確化

学習指導要領の学習内容を考慮し、各教科ごとに単元の目標分析を行う。その目標をもとに、生徒につける「基礎・基本」となる力を明確にし、生徒一人一人に確かな力がつくような指導計画を立案する。

#### (2) 研究内容2 意欲をもたせる学習活動

基礎・基本を定着させるために、生徒の興味・関心が高まる学習活動を探る。

#### (3) 研究内容3 評価

- ① 自分の学習を振り返ることで、次への課題を自分なりに見つけることができる生徒を育てる自己評価の在り方を明らかにする。(自己評価)
- ② 仲間とのかかわり(バズ学習)から相互で学習を振り返り、自分や仲間の成長を、認め励まし合い次への意欲を喚起づける評価の在り方を明らかにする。(相互評価)



- ③ 教師が生徒の学習の成果やバスでの姿や様子を評価し、認め励まし価値づける。  
(教師の評価)

以上の(1)～(3)は単独とは考えず、一連の流れの中にあるものと考えて研究を進めていく。

#### 4 実践

1年生 理科 『植物の世界』 ～植物の生活とからだのしくみ～

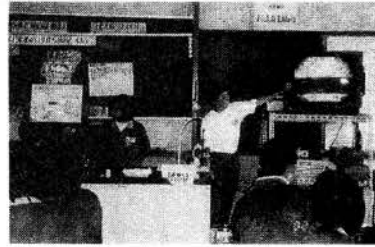
##### (1) 研究内容1 基礎・基本の明確化

単元指導計画の中に、4観点からの基礎・基本を明確にした。本時では、特に「観察・実験の技能・表現」「科学的な思考」の2観点を重点とした。また、生徒一人一人が課題に対しての考えをもち実験に臨んで、事実から考察できるよう、前時の学習をも大切にしました。

##### (2) 研究内容2 意欲をもたせる学習活動

###### ① 意識が連続する単元指導計画の作成

導入時に発見バスを行い、「見つけた植物のからだのしくみ」や「疑問点」「学習したいこと」を発表し合った。そういった意欲をもとに生徒の意識が連続するような単元指導計画を作成した。



###### ② 効果的なバス

本時では『課題：葉が光合成を行うための工夫を見つけよう』に向けて、深く課題追究ができるよう、実験バスを位置づけた。また、次のような生徒の考えをもとに、3つの方法別実験を設定し、学習への意欲化を図るとともに学ぶ楽しさを求めた。

〈生徒の考え〉

- A：水や養分の通り道が必要だ。葉脈のつくりを調べてみよう。  
B：酸素や二酸化炭素が出入りする所が必要だ。葉の表面を調べよう。  
C：日光を吸収しやすいつくりがあるだろう。葉の断面を調べたい。

実験バスでは、実験の目的を確認し合い、実験の中で見つけたことや予想される結果を交流するなど、積極的なバスが行われた。また、考察につながる事実を見逃さないため教師は再度観察を促したり、問い返しをさせたりする机間指導を行った。

(目的の確認の例)

6班では、前回休んだS君にAさんがノートを見せたり、実際にやって見せたり、詳しい説明を加えたりしていた。S君も、目的意識をもって実験を行うことができた。

(問い返しの例)

- S1 「桜の葉脈は、葉全体に張りめぐらされているね。これ描くわ。」  
T 「葉脈が張り巡らされていると、何かいいことある？」  
S2 「全体に水が行きわたる。」  
S3 「つゆくさも描いた方がいい？」  
S2 「うん。これは桜と違って縦に葉脈が通っている。描こうよ。」  
T 「それ発見！」

さらに8班では、次時への課題意識や学習意欲を見せていた。

「葉には、本当に水が通っているのか、色をつけて調べてみたい。」

### (3) 研究内容3 評価

学習認知面では、単位時間や単元ごとの評価規準を明確にし、教師側と生徒側の両面からの評価を考えた。学び合いの面では、自己評価カードに「仲間との関わりの中で見つけたよさや理解できたこと」の欄を設け、相互評価をさせた。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ① 基礎・基本の明確化に関わって
  - ・4観点から基礎・基本を明確にしたことで、生徒達も単元の学習内容、こういった力をつける学習であるのかよく分かり、目的意識をもって学習を進めることができた。また、単元指導計画を作成し、各観点についての評価規準を明らかにし、学習活動の振り返りと定着を生徒に促すことができた。
- ② 意欲をもたせる学習活動に関わって
  - ・単元指導計画の見直しにより、題材の精選を図ることや、生徒の学習意欲を高めることができた。また、バズを効果的に活用することで、生徒一人一人の目的意識はより高まり、意欲的に学習活動することとなった。
- ③ 評価に関わって
  - ・学習認知面と学び合いの2点から、自己評価・相互評価・教師の評価を行ったことで、基礎・基本の定着と学級集団の高まりを生み出すことができた。

### (2) 課題

- ① 基礎・基本の明確化に関わって
  - ・教師の意図とした「ねらい」と生徒とのズレが生じ、追究の場で具体的な活動につながらない場面も見られた。今後は、各教科の「基礎・基本」をより明らかにさせ、全校での共通理解も深めていきたい。
- ② 意欲をもたせる学習活動に関わって
  - ・発達段階や、習得した技術に応じた学習活動を仕組むこと、必然性のある学習課題づくりを心掛け、個々の生徒や学習集団に対応した内容を吟味したい。
- ③ 評価に関わって
  - ・「ねらい」をより明確なものにし、指導と評価の一体化や、自己評価のあり方の実践を積み重ねていく必要がある。
  - ・仲間との関わりを深くするために、相互評価の時間を確保し、仲間のアドバイスによって進歩した自分自身を実感・評価させたい。
  - ・指導目標に対して指導方法を工夫し、成果に応じて生徒を評価していきたい。

## 第4分科会

### 〔発表主題と提案者〕

トライやるウィークの実践

兵庫県尼崎市立大庄東中学校 前 滝 康 彦

国語科における協同学習の可能性  
— 今育てたい「ネットワーク構築力」 —

岐阜県大垣市立北中学校 横 幕 将 成

### 〔助言者〕

石 田 裕 久 (南山大学教授)

坂 西 友 秀 (埼玉大学教授)

久保田 滋 (芦屋大学教育研究所)

後 藤 東 一 (岐阜県土岐市立土岐津中学校長)

### 〔司会者〕

齋 藤 進 (東京都杉並区立向陽中学校教頭)

### 〔記録者〕

石 川 俊一郎 (東京都杉並区立泉南中学校)

# トライやるウイークの実践

－ 総合学習における小集団学習と評価 －

兵庫県尼崎市立大庄東中学校 前瀧 康彦

## 1 はじめに

兵庫県では、神戸市での中学2年生による児童殺傷事件等の反省から平成10年度から体験学習を通して地域に学び、共に生きる心や感謝の心を育み、自立心を高めるなど「生きる力」を育成するため中学2年生全員に“トライやるウイーク”を行っている。

本校は、全校生徒200余名の小規模校である。6～7年前は、喫煙・対教師暴力・器物破壊などの生徒指導上の問題行動も多かったが、最近ではそのような問題行動はほとんどなくなった。この変化の背景には、教職員の共通理解による生徒指導體制の確立などが考えられるが、日頃の授業を始めとする教育活動の充実が開発的生徒指導となっていると思う。2年生の総合学習は、テーマを「人間・職業」として、トライやるウイークをその中に位置付け、その事前学習としてドリームズ カム トウルー（夢を共に現実に）と称し、様々な分野の第1線で活躍している社会人の方を講師として招き、話を聞いている。

## 2 総合学習の概要（2年生）

時期	項目	概要
4月	オリエンテーション	1年間の活動の説明と希望調査
4月	ドリームズ カム トウルー	アナウンサー、女優、警察官、保母、看護婦、料理人、介護士、新聞記者など13人を講師に迎え講話・実習を行う。
5月～	発表・報告会の準備	同じ講話を聞いた者の小グループで、発表会に向けての活動を行う。
6月	発表・報告会	2年生の学年内での発表会を行う。＝資料1＝
7月	トライやるウイーク	月～金曜日の1週間、自分の希望した活動場所にての体験活動を行う。 ＝資料2＝
9月～	発表会・報告会の準備	同じ体験した者の小グループで、発表会に向けての活動を行う。
10月	発表・報告会	全校生徒に対しての発表会を行う。
11月～	全学年共通教材で 「基礎学習」	週2時間、国語・数学・英語の基礎学習 年に3回「東中検定」の実施

### 3 総合学習の評価のあり方

#### (1) 生徒による自己評価

各単位時間の最終段階もしくは取り組んだ期間での最終段階での自己評価。観点や項目に応じて記述・記録させる。

＝資料3：評価票＝

#### (2) 生徒相互の評価

発表会など他の生徒の取り組みを観察・見学出来る機会を設定することで可能になるので、毎時間実施できるとは限らない。

#### (3) 教師による評価

観察・面接・質問紙・ノート・レポート・作品などの提出により学習状況を適切に把握する。また、自己評価に対する所見を必ず記入して生徒に還元する。

#### (4) 指導に対する教師の自己評価

次のようなことを、反省・分析・対処する必要がある。

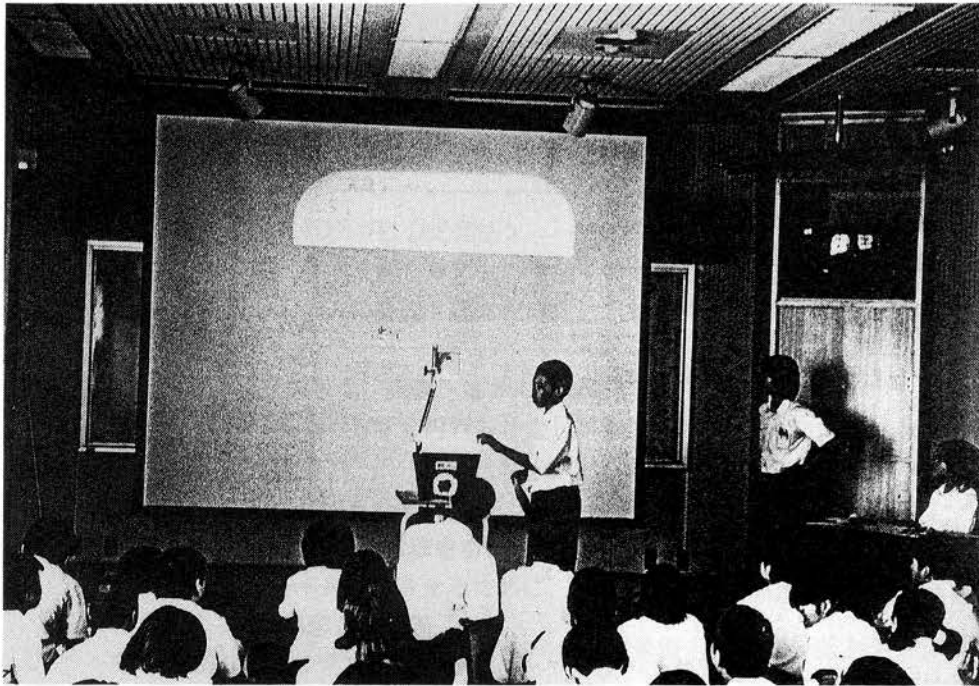
- 生徒への課題の与え方・課題発見の手順の助言は適切であったか。
- 学習に必要な用具・機器などの設備等の準備は十分であったか。
- 学習意欲を高めるような働きかけを適切にできたか。
- 学習を進めるに当って施設・人間関係は十分考慮したか。

### 4 おわりに

平成9年度後半に突然、県教委よりトライやるウィークの実施を通知され、現場は戸惑い不安を持ちながら試行錯誤してきた。しかし、実施中の子ども達の様子や顔を見ていると学校では見せない一面もあり、驚かされることが多かった。特筆すべきは不登校（ほとんど学校に出席しない）の生徒も参加する可能性があることである。また、事後アンケートの結果（資料4）を見ていると有意義な活動であることがわかる。改善すべきは改善しながら当分は継続発展していくと思う。

学習指導要領では、学校5日制導入にあたり、生涯学習時代に向けて子供たちに“生きる力”に育成を唱えている。「中学校は、生徒指導が大変だ」と言われる。実際、その通りなのであるが、問題行動の対処に追われる大変さと積極的生徒指導に取り組む大変さがある。ここでは、問題行動を起こさせないために積極的生徒指導に力を注ぐ必要があることを強調したい。中学校において、生徒指導上の問題を理由として指導法の工夫・改善が遅れるとしたら改革はできない。非行も戦後第4のピークであると言われている。この原因の1つは、自律心のなさや親と子ども、先生と生徒、生徒同士のコミュニケーションの不足であると言われている。バズ学習の基本精神が生徒間、先生と生徒、親子での人間的かわりを大切にすることから、日々の教育活動や授業の中で大いに利用されることを期待したい。

=資料1=



=資料2=

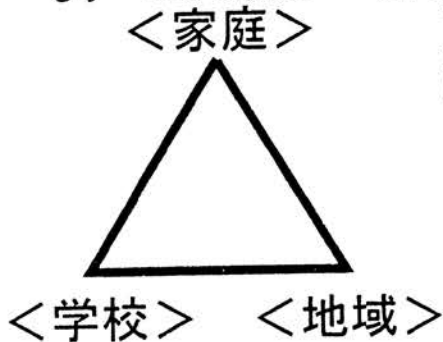
### なぜ「トライやる・ウィーク」なのか

中学生は、心も体も大きく成長する時期です。この大切な時期に、時間的・空間的なゆとりを確保し、地域や自然の中で自分の選んだ体験をとおして豊かな感性や創造性などを自ら高めたり、自分なりの生き方を見つけることができるように支援するものです。

「トライやる・ウィーク」のトライには二つの意味があります。一つは文字どおりTRY『試す』『挑戦する』と言う意味です。学校では体験することのできないことに挑戦する1週間ということです。

もう一つは<家庭>・<学校>・<地域>の三者を指すトライアングルと言う意味です。家庭・学校・地域社会の三者が一体になって、生徒が自らの興味・関心に応じた体験活動に挑戦するのを支援していきましょうとするものです。

三者連携のもと、地域のみなさんが手を携え、子どもたちを育てていく環境をつくり、中学生の心の教育の充実を図っていくことを期待するものです。



=資料3=

### トライやるウィーク自己評価票

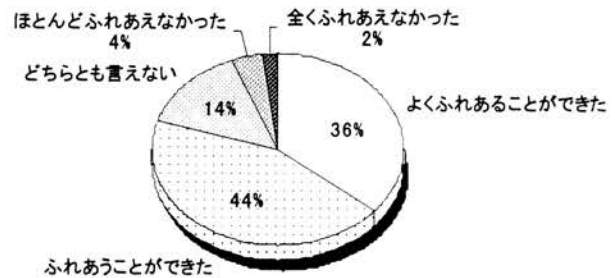
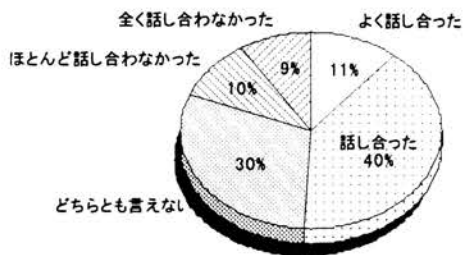
いろいろな人達の協力で1週間、“トライやるウィーク”ができました。それぞれの項目について、具体的にどうかア～オに最も近いところに○をつけましょう。

学 年	2	組	No	氏 名			
項 目			自 己 評 価				
1. どのような活動をしましたか？							
2. 自分の取り組む活動について事前・期間中に家庭で話し合いましたか？			ア よく話し合った ウ どちらとも言えない エ ほとんど話し合わなかった オ まったく話し合わなかった	イ 話し合った			
3. 指導ボランティアや地域の人達とふれあいがありましたか？			ア よくふれあうことができた イ ふれあうことができた ウ どちらとも言えない エ ほとんどふれあえなかった オ まったくふれあえなかった				
4. あなたにとってこの1週間はどんな1週間でしたか？			ア 大変充実していた ウ どちらともいえない エ ほとんど充実していなかった オ まったく充実していなかった	イ 充実していた			
5. このような活動を、機会があればまたやってみたいですか？			ア 是非やってみたい ウ どちらともいえない エ あまりやりたくない オ まったくやりたくない	イ やってみたい			
6. 時間を守って活動ができましたか？			ア 完璧に守れた ウ 注意された	イ だいたい守れた			
7. あいさつや言葉使いはきちんとできましたか？			ア 大変よくできた ウ 注意された	イ だいたいできた			
8. 事業所や地域の人に注意されたことはありましたか？			ア ない イ ある ( )				
9. この1週間を5段階で自己評価すると			5 大変よかった	4 よかった	3 普通	2 努力が必要	1 全然駄目だった
<1週間で感じたことを書いてください>							
_____							
_____							
_____							
_____							
先生より							

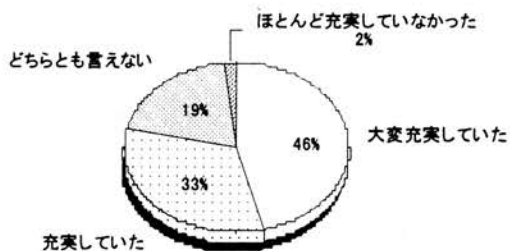
# アンケートから

## ～中学生～

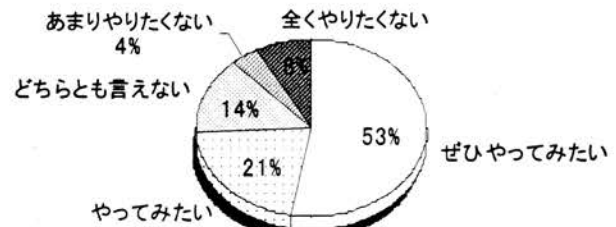
- 1 事前、期間中に家庭で話し合いましたか      2 地域の人たちとふれあうことができましたか



- 3 どんな1週間でしたか



- 4 機会があればまたやってみたいですか



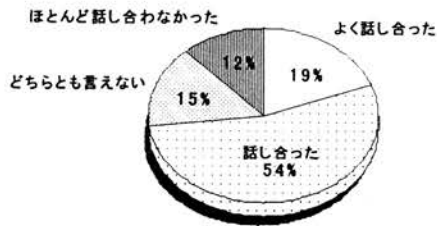
### 5 この1週間で感じたことは

- ◎公共の場なので、色々な人が来ていた。図書館の仕事は思ったより、肉体労働が多く大変だった。忙しい分、充実していた。
- ◎とにかく楽しかった。自分の行きたいところに行って手伝いすることが、とてもうれしかった。前より自分が生き生きしているような気がした。楽しくて、たまっていたイライラが吹っ飛んだようだ。「そうじとかしんどかった。」と思っていたのは最初の時だけで、あとは体を動かして頑張ることがすごく楽しくてうれしかった。毎年あってほしい。
- ◎しんどかったけど、こうやって大人になれば生活して行くんだなあと思うと、しんどいなんて言ってもらえません。とてもいい体験でした。
- ◎教室で授業受ける時より、自分が生き生きしていたと思う。勉強より、とてもやりがいを感じた。5日間じゃ足りない。
- ◎未知の世界を体験し、大変おもしろかった。カヌーで庄下川や武庫川を下るという経験は2度とないと思います。この体験ができたのも多くの人たちの協力があったので、大変感謝しています。

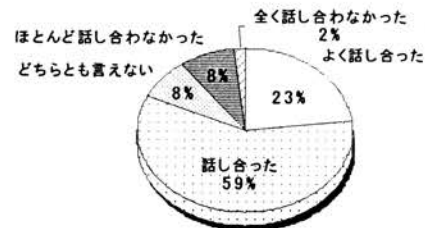


## ～ 保護者 ～

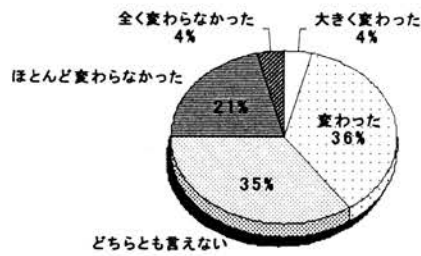
1 子どもたちとトライやるについて  
事前に話し合われましたか



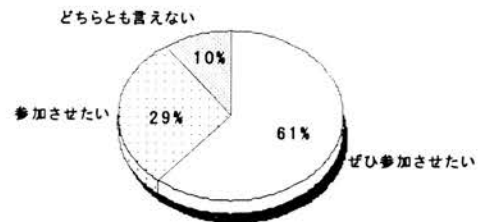
2 期間中に子どもたちとこの活動  
について話し合われましたか



3 この活動をとおして、子どもたちの  
見方が変わりましたか。



4 このような活動の機会がもしあば  
また参加させたいと思いますか



5 活動についてどうでしたか

- ◎体育館でトライやる実施中の子どもたちと一緒に活動する機会がありました。とても真面目にきびきびとしている姿がさすがでした。
- ◎実社会の人たちと積極的に関係しながら、活動することは子どもをより成長させてくれます。「トライやる・ウィーク」は色々大変かも知れませんが、今後も続けてほしいと思います。
- ◎学校だけでは体験できない、社会参加ができたと思います。これからの人生において貴重な体験になったと思います。
- ◎何かを最後まで責任を持ってする事の大切さを分かってもらえればと思いました。自分なりに何かをとらえられたのではと思っています。経験を生かしてほしいと考えています。
- ◎働くという意味を少しでも分かってもらえればいいし、簡単にお金は稼げないということ、汗かいて労働するということを実感できる子どもたちがたくさん増えたらいいと思います。受け入れる施設に関しては大変ありがたいと思っています。
- ◎仕事の大変さや、楽しさを少しでも学べたようで良かったと思います。いろんな職業にふれ、興味を持つきっかけになればいいと思うので、いい活動だと思います。

# 国語科における協同学習の可能性

— 今育てたい「ネットワーク構築力」 —

大垣市立北中学校 教諭

横 幕 将 成

## 1、現代の国語科が求められているもの

移行期間を経て、平成十四年度から新しい学習指導要領に基づいた教育が各小・中学校で始まっている。保護者やマスコミなども「学力低下」「絶対評価」といった言葉をキーワードに、現代の教育に対して関心を寄せている。

教育に「不易」と「流行」があるとして、学習指導要領が改訂されるのは「流行」を取り入れる必要があるからだろうと私は考える。国語科教育においては、「伝え合う力」を高めることによって相互の理解を深め、人間関係を構築すること、そして、課題を発見し、よりよく解決するための論理的な思考力や想像力を高めることが、「生きる力」として求められた「流行」と言えそうだが、果たしてそうであろうか。

では、現代の国語科における課題は何か。特に問題と言えるのは人間関係を構築できない児童・生徒が増えていることだろう。若者に限らず、関わりがないと生活していけないのが人間である。人はコミュニケーションをとりたいのである。携帯電話を持っていないと不安で仕方がなくなる若者達も増えているのも、その一例であろう。

それにも関わらず、人と顔を向き合わせてコミュニケーションをとることは疲れると言い、安心感が持てないのだと言う。私は人間関係を構築する能力が育っていないことが、顔を向き合わせてコミュニケーションをとることに疲れる一因であると考え。また、感情的、主観的ではなく、論理的、客観的に物事をとらえ、自分の考えを、言葉を媒介にして伝える能力が育っていないこともあると考え。

「プレゼンテーション」や「メディアリテラシー」など、新たに国語科でつけるべき言語能力や言語技術も提言されてきている。出てきている。しかし、国語科とはどのような力をつけるべき教科なのかを、明確にする必要がある。つまり、「流行」がどんなものであろうか、「不易」となる部分がしっかりしていれば対応できるはずであると言うのが私の考えである。

では、国語科の「不易」となるのは何であろうか。例えば、浜本純逸氏は国語科の基礎として、「言語活動力、言語を通して人間関係を結ぶ力、言語文化を楽しむ力」としている。ならば、一見「流行」と見えることは、実は「不易」の部分であり、改めて見直す時期に来たに過ぎないのではないだろうか。

このような多くの論考、そして、私自身のこれまでの実践から考えていくと、国語科で育成していく必要があるのは、「人と人がコミュニケーションしていく能力と技術」と「多様な、かつ論理的な思考能力と技術」であると考え。そして、これらの能力と技術は「人と人とのネットワーク」「人とものごととのネットワーク」を授業において作り、課題解決学習の中で育成できると考えている。この国語科の学習過程を「ネットワーク構築型」とし、その可能性をさぐっていく。

## 2、どんなネットワークを目指すのか。

「人と人とのネットワーク」「人とものごととのネットワーク」を授業の中で構築することによって国語科で育成すべき力をつけることができると前述した。例えば、現代社会においてコミュニケーションが問題になるのは、コミュニケーション能力を育成する場が少なくなっているからであろう。故に、感情的、主観的な話し方をすることや、相手のことを考えない言動、言葉よりもまず先に出たりすることも起こるのである。

そうであるならば、学校教育の場では、コミュニケーションをお互いが取り合う場を設定し、言葉を用いて課題や問題を解決していく経験を児童・生徒にさせる必要がある。

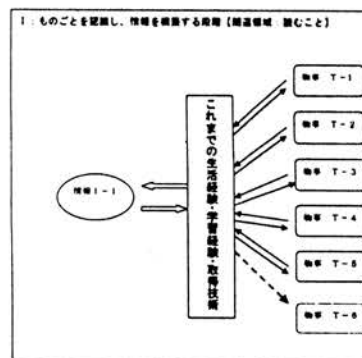
では、そのネットワークは児童・生徒個人の中で、あるいは児童・生徒相互の中でどのように構築されるのか。現在の国語科の領域では「A・話すこと・聞くこと」「B・書くこと」「C・読むこと」そして「言語事項」となっているが、それぞれの領域との関連も図りながら考える必要がある。

人は、ものごとを、言葉を用いて認識した内容を、言葉を使って解釈・分析し、その結果を題材にして他とコミュニケーションを図ろうとする。また逆に、コミュニケーションの中で認識した内容を、言葉を使って解釈・分析し、ものごととして認識する。

これを、モデルで表すならば、①認識②解釈・分析③人間関係の構築の三つは、言葉という一本の線によって有機的な結合が図られているというものでなければならない。

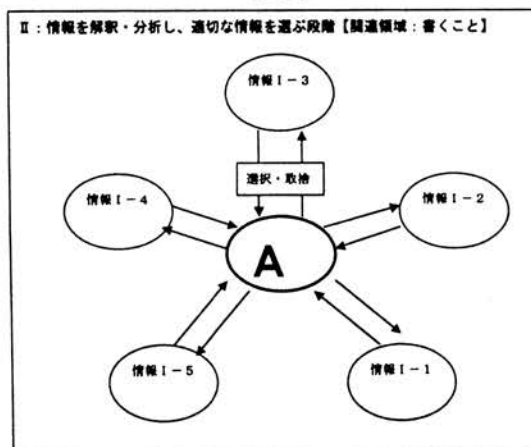
### (1) ものごとを認識し、情報を構築する段階【読むことに関連】

ものごとは事象だけでなく、文章表現や言語など印刷された文字情報や音声、映像情報の場合もある。与えられた課題に対し、個の中では、多くのものごとからこれまでの生活経験や、学習経験、学習技術に基づいて、課題に対しての一次情報が作られる。これは、国語科の領域で言えば、「C・読むこと」にあたる。



### (2) 情報を解釈・分析し、適切な情報を選ぶ段階【書くことに関連】

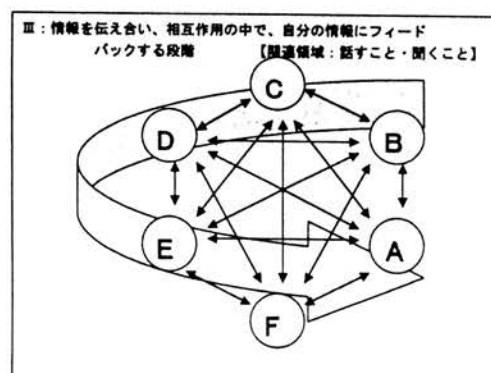
与えられた課題を解決するための一次情報は、一つとは限らない。個の中で、課題が求めている情報を出すために、一次情報を解釈・分析し、適切な情報を選択する段階である。これは、国語科の領域で言えば、選材の部分の内容であり、「B・書くこと」にあたる。



### (3) 情報を伝え合い、相互作用の中で、自分の情報にフィードバックする段階

【話すこと・聞くことに関連】

相互作用によって、個と他との間で、言葉を通したネットワーク作りが行われるのがこの段階である。情報を伝え合うことによって、他と比較し、新たな発見をしていく。図は、6人でバズセッションを行った例であるが、これだけのネットワークを作ることができる。この中で個は、仲間との相互作用の中で、言葉を通した人間関係作りをするとともに、学んだことを学習経験としてフィードバックしていくのである。



それぞれのネットワークは、言葉という線で結ばれている。授業の前半では、Ⅰ→Ⅱ→Ⅲの流れを作ること、後半では、Ⅲ→Ⅱ→Ⅰの流れを作ること、生徒の理解の流れを意識した授業展開ができる。生徒に提示する課題も、どの部分を強化していくのかを意識することによって、どんな力をつけたいのかがより明確なものになる。さらにいえば、ネットワークで線が明らかになっている場合、人間関係を構築するためにはどの部分の技術を強化すればいいのかが明らかになり、バランスが取れた学習過程を組むことが可能となる。

### 3、協同学習を取り入れる利点

このようなネットワークを構築することによって、人間関係を構築する能力を育成すること、そして、論理的、客観的に物事をとらえ、自分の考えを、言葉を媒介にして伝える能力を育成することが可能になる。

私は、このようなネットワークを作り上げるために「協同学習」の手法を取り入れることが望ましいと考える。小集団で学習することは、個の負担を軽減するとともに、集団に埋没することもなくなることを意味する。参加する機会（場）を設定できることでネットワークを構築する力を、経験を通して育成することができる。つまり、ネットワークを構築する小社会を作ることができるのである。

また、教室に集まる児童・生徒には、前提として当然一人一人学力差があり、これまでの生活経験、学習経験の差、換言すれば、文化の差といえるものもある。そして、中学校、高校学校、大学、実社会と成長していくにつれ、「異文化」を背景に持つ存在と一緒に生活していくことになる。学校教育でもこのような多様性を意識して学習活動を進める必要がある。しかし、多様なものの考え方に触れることによって、考えをより深めることができる。仲間とともに協力して課題を解いていく協同学習の学習過程は、ネットワークを広く、深く張り巡らせるために必要なのである。

#### 4、実践例 単元・中学校1年生「暮らしを見つめる」

この単元では、環境問題を扱う。現在実践中であるので、成果と課題については大会で発表したいと思う。

この単元の学習計画を作成するにあたり、いくつか留意する点がある。

- ① 環境問題と一口に言っても範囲が広く、生徒がデータを探すのはいいが、生徒の負担がかなり大きくなる可能性があること。そのため、データ収集に時間がかかるだけでなく、どんなデータを、どこから、どうやって探してくるのかを教える時間が必要になる。しかし、実際はそんな時間を取ることは不可能である。
- ② 環境問題自体が身近なようで身近ではなく、生徒自身が問題点を見つけられない。また、テーマを絞ることは、生徒が意欲をなくしてしまう可能性がある。
- ③ 学習内容は意見文を書かせ、シンポジウムを開くということであるが、あくまでも調べたことを元にした自分の意見を書くのである。調べたことを羅列したのみで終わる実践をよく目にする（インターネットで調べたことを丸写しするなど）。それは避けたい。
- ④ 本校は現在、小中連携教育を研究している。中学校の授業に、小学校の教諭がT2として入る。お互いの連携も考える必要がある。さらに、大垣市で小中連携教育を進めるにあたり、国語科で指標となる年間指導計画を作成した。基本的にはこれに準じて指導計画や評価規準を考える必要がある。

しかし、教科書の流れは、私が考えるネットワークの流れに沿ったものである。そこで、単元の学習内容、および改善の方法を次のように考えた。

I：教材文としてある『魚を育てる森』『めぐる輪』の中で生きる』を使い、主張にふさわしい題材の見つけ方を学習する。その際、NHKの番組「プロジェクトX」での題材の取り上げ方とも比較し、选材の工夫について理解する。

II：テーマを「北中学校がISO14001規格を取得するには」とし、自分たちの学校生活を振り返り、自分たちの生活が環境問題を引き起こしていないかを点検し、どうすれば解決、改善が図られるかを考えさせる。また、グループを「環境問題テーマ別」にし、同じ視点から環境問題を語ることのできる仲間どうしで、共通の課題を作り、調べてきたデータを共有することができるようにした。これによって、個人の負担を低減する。

III：シンポジウムを開くことで、個人の力を試す場を設ける。練習などで仲間から評価を受けることにより、あるいは、仲間の発表を聞くことにより、学習内容と人間関係のネットワークを広げる活動を仕組む。また、あくまでも集団に個を埋没させないように、学習に緊張感を持って臨ませることもねらいとする。

以下に、この単元の単元指導計画を載せる。

中学校1年生 単元「暮らしを見つめる」単元指導計画（全13時間）

次	時		学習活動	学習課題	評価基準
1	1	魚を育てる森	『魚を育てる森』とビデオ『襟裳岬に春を呼べ』を比較し、視点をどこに当てるかによってどう内容に変化が表れるかを考える。	『魚を育てる森』とビデオがそれぞれしている主張の違いを考えよう。	筆者、番組制作者のそれぞれの主張を「どんな事例を取り上げているか」に注目して考えている。
	2		「腐葉土」の役割をまとめることにより、筆者の主張がどのような例によって強化されているかを考える。	「腐植土」が森と海にとってどういう意味を持っているのかをまとめよう。	森と海の生物との関連や「腐植土」の役割について理解している。
	3	めぐる輪	『「めぐる輪」の中で生きる』で述べられている事例と意見についてまとめる。	筆者の主張とその主張を裏付けるための事例をまとめよう。	筆者の考えや意見と事例を区別し、整理して読み取っている。
	4		二つの説明文から学んだことをもとにして、「地球環境を守るためにできること」というテーマで環境に対する課題を考える。	地球の環境を守るために今何をすべきか、自分の課題を考えよう。	筆者の問いかけを真剣に考え、自分たちの生活を振り返り、環境についての自分の考え、主張を持っている。
2	5	課題について調べよう	自分が設定した課題に対して自分が訴えたいことを考えるとともに、取材計画を立てる。	課題を設定し、その解決のためにどんなことを調べればいいのか、考えよう。	課題設定のための話し合いに積極的に参加し、調べ方や方向性も考えて計画を立てている。
	6		調べてきたこと、自分の意見・提案を分けてカードに記入し、文章の構成を考える。	主張したいことがより明確になるように、事例や意見の出し方を工夫しよう。	調べてきたことを自分の考えを補足する資料とそうでないものに分け、意見・提案がより明確になるように構成を考えている。
	7		p134の例をもとに、引用の仕方、書き出し、段落の役割などに注意して、意見文を書く。	例文を参考に、読む相手にわかりやすい文章を書こう。	書き出しや引用の仕方、文末表現に気をつけ意見文を書いている。
	8		出来上がった意見文を観点に従って読み直す。	相手に、より自分の主張が伝わるように、表現や構成を工夫しよう。	自分の考えがより分かりやすくなるように、構成や叙述の仕方を工夫している。
	9		仲間どうして読みあい、お互いの文章のいいところ、工夫したところを相互評価する。	意見文の交流会を開き、仲間の考え方のいいところを学ぼう。	仲間の文章を適切に評価し、よいところは自分の作品に取り入れようとしている。
3	10	意見	意見文の発表会の準備をする。	意見文をもとに、スピーチ原稿を作ろう。	話し方や示し方を工夫し、相手を意識した分か

	交 流			りやすいスピーチになるように工夫している。
11	会 を も と う	ペアで実際に発表原稿を読みあい、改善すべきところなどを交流し、よりよいものを目指してさらに練習をする。	自分の主張がより伝わるように、話し方や、話す内容を工夫しよう。	声の大きさ、間のとり方など、あらかじめ提示した観点にしたがって相互評価し、相手に分かりやすいスピーチを目指してさらに工夫をしている。
12		小グループでの意見交流会を開く。	グループ・ディスカッションを開き、お互いの意見を交流しよう。	仲間の意見を客観的に受け止め、疑問点などがあれば質問している。
13		各グループの代表者によるシンポジウムを開く。	シンポジウムを開き、仲間の発表の仕方のよさを学ぼう。	シンポジウムでの仲間の意見を聞き、自分の意見文や発表の仕方を見直し、よいところを取り入れようとしている。

## 5、まとめ

昨年度までの研究実践から、国語科において、協同学習の成果と課題を挙げる。

- ① 仲間の話を「聞く (hear) 聞く (listen) 訊く (ask)」(高橋俊三の分類) する場が増え、自由な批評、解釈の確認と補足、復習が容易になり、学習の効果が上がる。
- ② さらに効果的な学習を進めるために、「何を明確にしたいのか」「共通の課題を持つ」「共通の尺度(読解法や作文の技術、評価の基準など)を持つ」ことを大切にしたい。特に国語科では、「なぜ」「…の気持ちは」という課題がよく見られるが、これは生活経験から想起する力を求めているもので、言語感覚を必ずしも必要とはしていない。例えば、「母に涙を流させるために、どんな場面構成がされているか。」というようにし、言葉や表現、設定や構成に注目させ、根拠のある発言をもとに学習を進められるようにしたい。
- ③ 小集団で話し合う機会を設ければ確実に力がつく(私もそう考えていた)わけではなく、児童・生徒への系統的な指導、守るべき規則の定着を図る必要がある。

初めて協同学習に取り組む現在の1年生は、国語の授業を楽しんでいる生徒が多く、バズセッションも上手に進められるようになった。現在の成果と課題を挙げる。

- 仲間の意見から学ぶことで、多面的に考える態度が生まれている。
- 自己評価、相互評価によって、何をどう考えればよかったか、自分の学習に生かしている生徒が多い。
- 言葉や表現を大切にしている。この言葉を使うことがどういう意味を持つのかを考えて読んだり、書いたり、話したり、聞いたりすることができるようになってきた。
- 「個」に学習成果を問う、発揮させる場が必要である。

現在、こんなことを意識しながら、実践を進めている。

## 協同学習参考書一覧

- ① 有元佐興・加藤孝史・望月和三郎・杉江修治編 1997  
『学校は変わるか』 日本教育総合研究所  
授業改善を中心とした協同学習の実践集です。バズ学習の関心の広がり  
と技法の開発の様子を見ることができます。
- ② 市川千秋 1987 『自由バズを取り入れた授業の進め方』 明治図書  
バズ学習の新しいバリエーション、自由バズの進め方を理論的根拠を示  
しながら紹介したものです。
- ③ ジョンソン・ホルベック（杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳）1998  
『学習の輪 -アメリカの協同学習入門-』 二瓶社  
アメリカの代表的な協同学習入門書です。日本の学校場面でも違和感  
なく使える事例に満ちています。
- ④ 丸山正克 1996 『仲間との絆を育てるバズ学習のすすめ』（株）みらい  
小学校教師として長年バズ学習を実践してきた優れた実践者の研究的  
実践の成果です。具体的でそのまま実践可能な内容に満ちています。
- ⑤ 望月和三郎 2002 『心とこころの格闘技 -授業の人間関係-』 一粒社  
中学校、高校での数学のバズ学習の紹介と、著者のバズ学習論が内容  
となります。単元見通しを軸とした精力的な試みに応える生徒の姿が  
生き生きと描かれています。
- ⑥ 越智昭孝 2001 『バズ学習と同和教育』 揺籃社  
同和教育の基本とバズ学習の原理との整合性の発見を通して、学校  
と地域を結ぶ教育態勢づくりを行政も巻き込んで進めていった大規  
模な実践報告です。
- ⑦ 竹下英二 1990 『優しさと思いやりの育つ音楽科グループ学習』 明治図書  
音楽という教科でグループを活用した教育の実践と理論が示されて  
います。子どもの相互信頼を育てると同時に音楽的情操を育ててい  
く教師の役割がはつきりと示されています。
- ⑧ 杉江修治 1999 『バズ学習の研究』 風間書房  
バズ学習の実践的・理論的研究の集大成です。バズ学習を代表的な  
日本の協同学習の理論と位置づけ、協同に関する理論的研究につい  
ても詳しく述べられています。
- ⑨ 塩田芳久 2000 『バズ学習のめざす教育』 揺籃社  
塩田教授の残した講演の記録を起こしたものです。以前の内容も、  
今にそのまま生きる先見性がはっきりとわかる内容になっています。



## 第34回全国バス学習研究大会役員一覧

### ○第34回全国バス学習研究大会

会 長	長谷川 貢 一	(東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校長)
運 営 委 員	杉 江 修 治	(中京大学教授・全国バス学習研究会常任委員)
	石 田 裕 久	(南山大学教授・全国バス学習研究会常任委員)
	関 田 一 彦	(創価大学助教授・全国バス学習研究会委員)
	稲 田 瑞 穂	(東京都清瀬市立清瀬第二中学校長)
	荒 木 正 志	(東京都練馬区立光が丘第八小学校長)
	小 林 一 英	(東京都練馬区立光が丘第一中学校長)
	望 月 和 三 郎	(東京都バス学習研究会事務局長)
大会事務局	石 井 良 典	(東京都杉並区立阿佐ヶ谷中学校教頭)

### ○全国バス学習研究会

会 長	長 縄 秀 孝	(愛知県春日井市立南城中学校長)
研究者代表	梶 田 正 巳	(名古屋大学大学院発達科学研究科教授)
事 務 局	田 川 正 樹	(愛知県春日井市立西尾小学校長)
	霜 和 美	(愛知県春日井市立東高森台小学校教頭)

○研究協議会の助言者、司会者、記録者は、各レポートの扉に記載